ＩＳ―インフィニット・ストラトス― 季節の廻る場所

椿牡丹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ―インフィニット・ストラトス―　季節の廻る場所

【Ｎコード】
Ｎ７２３７Ｙ

【作者名】
椿牡丹

【あらすじ】
ＩＳ。
正式名称、インフィニット・ストラトス。
女性にしか扱うことのできない兵器だ。この兵器の登場により、世界はその姿をがらりと変えていた。
そんな時、一人の男子学生がＩＳを起動させる。
『世界で唯一ＩＳを使える男』には彼を取り巻く問題、そして次々と襲いかかる様々な困難が待っていた。

だがこの時、実はもう一人同じ受験会場に足を踏み入れている少女の姿があった。

これは本来ならば当たり前のように生き、当たり前のように死ぬはずだった少女が、その道行きを歪められていく物語。

プロローグ

インフィニット・ストラトス。
元々は宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツだ。しかしながら宇宙開発は一向に進まず、結果スペックを持てあました機械は『兵器』へと変わり、今となっては各国の思惑により『スポーツ』へと姿を変えて落ち着いている。
そんな『インフィニット・ストラトス』、通称『ＩＳ』には様々なものがある、がたった一つ共通する事柄があった。
それは『女にしか使えない』という致命的な欠陥だ。

「ここどこだ？」

市立施設の多目的ホール。その中を一人の少年が歩いている。
季節は冬。二月の真ん中であり、学生にとっては受験シーズンの真っ只中である。そんな時期に少年が何をしているのかといえば、もちろん受験をするための会場へと向かっているのだ。
ただし彼の足取りは不確かなもので、あっちに行っては戻り、こっちに行っては戻り、とただ歩いているだけのようにも見えないことはない。が、あたらずと雖も遠からず。
（これって迷ったんじゃ……いや、中学三年にもなって迷子は恥ずかしすぎる）
初めて来た受験会場で完全に迷子になっていた。

「とりあえず次に見つけたドアを開けるぞ。うん、それで何とかなるはずだ」

半ばやけくそとも捉えられるようなこの行為。
この行為が後の彼の人生を大きく変えてしまうことに、まだ彼は気付いていなかった。

そして『世界で唯一ＩＳを使える男』の誕生とほぼ同時刻。

「うわぁーん！！　ここどこなのー！？」

一人の女子生徒が道に迷っていた。

茶色を帯びたセミロングの黒髪に赤いカチューシャ。右側だけを三つ編みにするという個性的な髪型の少女だ。案内図と格闘しているものの、思ったような成果は挙げられていない。

先程の少年の迷い方が可愛く見えてしまう。なにせ彼女、既にこの多目的ホールについて一時間が経とうとしているのだ。
両親から「遅れるといけないからもう行きなさい」と言われた事もあり早めに家を出て、こうして指定された受験会場までやって来たのだが……。

両親のその心配は現実のものとなる。

いくら多目的ホールといえど一時間も彷徨えば中を一通り見て回る

事が可能だろう。しかしこの彼女、まるっきり周りのことを見ていなかった。

（早く行かなきゃ受験に遅れちゃう！！）

その事ばかりが専行してしまい肝心の『探す』という行為が疎かになっているのだ。

これでは見つかるものも見つからない。

「そこの学生、何をやっている！！」

「――っ！！」

不意に後ろからかかる声。

悪いことなど何もしていない。ただ道に迷っているだけなのだが、

その威厳のある声に思わず謝ってしまいそうになる。

振り返ると少女よりの頭一つ分大きな身長の女性がこちらに向かって歩いてくる。

――黒い！！

女生徒は喉まで出かかった言葉を何とか飲み込む。

初対面な上に相手は大人だ。それに思ったことをそのまま口にしても許してくれるような優しさは外見からは感じられない。

整った容姿、後ろで束ねられた艶のある黒い髪、すらりと長い身長。

スーツ・ネクタイ・ヒールと全てが黒で統一されているからだろうか、さらにシャープに感じられる。

「あの私、道に迷ってしまいまして」

「……ちなみに聞くが、左手で持っているそれは何だ？」
「えっ！？　コンパスですけど」
「右手で持っているものは何だ？」
「ここの案内図です。でもどうしてもここに辿り着けなくて……」
沈黙が流れる。
葉書に描かれている図の一ヶ所を指し示しながら固まる少女。
そんな彼女を見て歎息する女性。
見つからないのも当然だ。
一時間近く彷徨った結果、彼女は目的地の真逆に位置へと移動していたのだ。

「すぐそこを右に曲がってしばらく廊下を進むと扉がある。そこが試験会場だ」
「そうなんですか！！　ありがとうございます！！」
「ここは四時までしか借りていないからな。少し急いだ方がいい」
「はい！！」
案内図を見ることなく告げる女性の言葉に少女は大きく頷いた。
再度案内図を確認し、コンパスを確認すると少女は勢いよく走り出し。
左に曲がった。

「おい！！　ちょっと待て。お前は私の言うことを聞いていたのか？」
「えっ！？」
「もういい、面倒だ。ついて来い」
女性の言っている事が分からないのか、少女は首を傾げるも大人しく後ろについて行く。
ついて行くだけにもかかわらず未だコンパスと格闘しているところを見ると、自力で行きたいのかもしれない。そんな事を考えながら女性は問う。
「名前は？」
「えっ！？　あぁ、名前ですね。秋穂です」
えっと、と言いよどむ少女――秋穂の考えが分かるのか、自分から振った話であるために予想がついていたのか、女性は足を止めることなく言い放つ。
「私は織斑千冬だ」
自己紹介でも歩みは止めない。
が、続けるように言った秋穂の言葉に千冬は足を止めてしまう。
「千冬さんですか。綺麗な名前ですね」
「……」
「あ、あの私なにか悪いことを――」
「いや、何でもない。――ほら、着いたぞ」

「ほんとだ！！　ありがとうございました！！」

頭を下げる秋穂の表情は、あどけない少女そのもの。満面の笑みを浮かべながら扉を開け足を踏み入れる。

そんな秋穂の行った先――扉を見つめ続けているのは先程まで一緒にいた千冬だ。その凛々しい表情は変わらない、が彼女を良く知るものがここにいたならば、口元が微かに上がっていることに気付けただろう。

「単に知らないだけか、あるいは――」

最後まで言い切ることなく、足音を残して姿を消した。

第零話：それぞれの始まり

「無理矢理だったな……」

世界で唯一ＩＳを使える男――織斑一夏はベッドの上で天井を眺めていた。

あの日――一夏がＩＳを起動させ、世界で唯一ＩＳを使える男が誕生した日から一夏は日本政府に保護されている。

が、実際は保護という名の下で監視されている状態である。
ＩＳ学園に入学となれば、全寮制である上に滅多に外には出ることが出来なくなってしまう。今この時間は、一夏にとっても重要なものだった。

にもかかわらず、一夏がベッドから起きて何をするかと言えば。

家の掃除だった。

「明日ゴミの日だしな」

慣れた手つきでてきぱきと部屋の中を片付けていく一夏。
その様子は仕方がなくというものではなく、むしろ掃除を楽しんでいる風にも見える。

「ふぅ……。とりあえずこんなもんか」

昼頃から始めたにもかかわらず、外を見ると既に真っ暗となっている。

これから春へと季節が変わるとはいえ、今はまだ冬と変わらない。
窓から入ってくる風は、昼ならば日差しも出ていたために心地よかったが、掃除が終わり一息つくと涼しさを越えた寒さがやってくる。

「うぅ……まだ寒いな」

窓を閉め、風に当てられた体を震わせる一夏は、まとめたゴミ袋をきつく縛り、ゴミ捨て場まで持っていく。
この時捨てたゴミの中に、古い電話帳だと思っていた物が入っていることに気が付いたのはそれから一週間後のことだった。

◇　◇　◇　◇　◇

「へぇー。ＩＳにも色々あるんだー」

とある一室。
ぬいぐるみからキーホルダー、人形にいたるまで様々な種類の『可愛いもの』で埋め尽くされた部屋の中、一人の少女がベッドで寝転がりながら分厚い参考書に目を通していた。
ＩＳ学園――ＩＳ操縦者を育成するための学校――への入学が決まった新入生に送られるＩＳに関する基礎知識等が書かれた参考書だ。
その参考書、大きさ・分厚さもさることながら書かれている文字が小さい。
見る者が見れば、なにか別のものと見間違えてしまうかもしれない

代物だ。

「あれ？」

そんな参考書をゆっくりと、だが確実に読み進めていく少女だが、ふとあるページでその手が止まってしまう。

そのページの内容は『モンド・グロッソ』。三年に一度行なわれるＩＳの世界大会だ。今現在『スポーツ』として落ち着いているＩＳだが、それは建前でしかない。

ミサイルなどただの兵器では相手にならない。故に、ＩＳにはＩＳでしか対抗できない。それはつまり『ＩＳの性能の高さ＝軍事力』となるのだ。

だが、少女が手を止めた理由はそこではない。もっと単純で、そこに写った一枚の顔写真に見覚えがあったからだ。

「やっぱり千冬さん、ＩＳ学園の関……け、い……」

最後まで言葉にならない。どころか明らかに少女の顔が青ざめていく。

顔の筋肉はひくつき、参考書を持つ手は震えている。

『モンデ・グロッソ第一回大会優勝者　織斑千冬』

それは千冬が世界最強であることを示すものだった。

「嘘……千冬さん、優勝者なの？　ってことは世界一！？」

◇　◇　◇　◇　◇

ＩＳ学園、職員室。

ＩＳ操縦者を育成するための学校であるがゆえに、その教員ともなると仕事の量は膨大なものになる。

「今年の生徒はすごいですね」

「そうだな」

「イギリスの代表候補生に篠ノ之博士の妹さん、それになんと言っても織斑先生の弟さんがいますからね」

話しているのは千冬ともう一人、眼鏡をかけた女性教員だ。

一枚一枚の資料を丁寧に、手早く読み取り片付けていく。女性教員の仕事は決して遅いわけではない。が、隣で座っている千冬の仕事振りを見れば誰もが息を飲んでしまうだろう。

「あいつのことは置いておくとして……もう一人、面白そうな奴がいる」

ふと手を止めた千冬の目に止まる一枚の資料。

その表情から、資料を受け取った女性教員もどれだけ千冬がその生徒を目に留めているかを知る。

「へぇ、ＩＳ適性は……Ａですか。将来有望ですね」

「ランクなど今の段階ではほとんど意味がない。そういう意味では周りとは大差ないな」

「えっ！？　ま、待ってください。えっと……名前は……」

立ち上がり、部屋を出て行く千冬。それに続くようにして女性教員も慌てて職員室を後にする。

資料には、右側だけを三つ編みにするという個性的な髪型をした女子生徒の顔写真が貼られていた。
茶色を帯びた黒髪に黄色いカチューシャを着けている。

そこに記されていた名前を女性教員は忘れまいと強く印象づける。
千冬が目をつけるような生徒だ。おそらく何か特別なものを持っているのだろう。

「えっと……春日秋穂（かすがあきほ）さん、ですね」

第零話：それぞれの始まり（後書き）

本格的に始まりましたＩＳでございます。
あまり後書きというものは得意ではありません。が、そうも言っていられません。

主人公の軽い紹介でもしておきたいと思います。

まず名前ですが……。
ぶっちゃけて言いますと適当です。

一夏。千冬。→夏と冬。→春と秋がないじゃん！！→どっちかつけたいなー。→もう両方つけちゃえ！！
とこのような流れでつきました。
ちなみに春と秋を逆転させた『秋原春花』とか春花を春香にするかとか色々考えたんですが……。

春日が異様に私の中ではまりました。
もうこれしかない！！と思いました。

ちなみに『秋穂』以外に名前も思い付きませんでした。
こっちは語彙力の問題です。

まぁこんな感じで出来上がりました小説でございます。
余計なことはバンバンしていきたいです！！
これからよろしくお願いします

第一話：入学式と再会

入学式。
それは新たな出会いの場であり、学生にとっては、これから始まるであろう学生生活の第一歩として大切な一日となることは言うまでもない。

それはどこの学校であろうとも同じである。
たとえ女子生徒の中にただ一人男子生徒が混ざっていようとも変わることはないのだ。

（はぁ……。これから大変だよな。絶対……）

教室中央の一番前。そこが織斑一夏の座席だった。

突き刺さるような女子生徒の視線。かつて味わったことのない緊張感を感じながら一夏は一人黙ったまま椅子に腰掛けている。唯一の救いが幼馴染である女子生徒――篠ノ之箒がこのＩＳ学園に入学しており、クラスまで同じことなのだが……。

「……」

肝心の箒はというと一夏の事を覚えていないのか、はたまたわざとそうしているのか、全く声をかけてこようとしない。

だが、今は担任の教員をクラスで待機して待つ時間である。立ち歩いているような生徒は一人もいない。男子生徒がまともにいればこんな空気にもなっていないのだろうが、残念な事に男子は一夏一人

である。

これを中学時代の親友である五反田弾に――一夏としては本当に真面目に――相談したのだが、

『なんだなんだ！？　ハーレムルートまっしぐらだってのに不満があるっていうのか！？　おいおい、随分といいご身分ですねー。さぞかし楽しいんでしょうねー。お前一回死ねばいいんじゃね？』

という答えになっていない答え、もといただの悪口を言われるだけの時間になってしまった。

「……」

そんなわけで、大した心の準備も出来ぬままに入学式を迎えてしまいまともに周りの生徒と交流をすることもなく今に至っている。弾の言うようなおいしい展開には全くなっていない。どころか、一夏は今日この日を向かえて未だにまともな言葉を発していなかった。

「遅れてすみません」

突き刺さる視線に必死に耐え、気まずい雰囲気の中で過ごす一夏の心に一筋の光が差す。

今までどこに行っていたのかは知らないが、遅れていた担任の教員が教室にやってきたのである。

急いで教壇に立つ女性教師。制服を着ていないためにこの人が担任、なのかどうかは分らないが、少なくとも教師であることに間違いない。そして今までずっとこの瞬間を待っていた一夏である。嬉しくないはずがない。

が、瞬間的に一夏の頭からそれらのこと全てが消え去った。

一夏の座席は先に説明した通り中央の一番前だ。教壇に立つ教師からは一番近い距離に位置する。

「……」

今までもずっと無言だったのだが、それとはまた別の理由で一夏は無言になってしまっていた。

視界を占めているのは目の前に広がっている神秘ともとれる光景。未だかつて一夏が見たことのないものだった。

「一年一組副担任の山田真耶です。皆さんよろしくお願いします」

名前以外にも色々と言っているが、名前以外の情報はほとんど入ってこない。緑色の髪。身長が小柄に見えるせいか眼鏡がよく似合っている。そして一番の特徴。一夏の目が離れないものがその下にあった。

（で、でかい……）

小柄に似合わない豊満な胸部から目が離せなくなっていたのである。何が凄いのかといえばそのボリュームである。女性経験はないものの、男子校に通っていたわけではない。中学には当然ながら女子生徒もいた。その中にも異常に発達している生徒がいないことはなかったが……正直話にならない。

女性の胸とはこれほどまでに揺れるものなのかと、ある種の感動さえ覚えてしまっていたのだ。

目が離せない。じろじろと見るなど失礼極まりない行為であり、ましてやそれに感動するなど言語道断だ。

相手は教師であり、すなわちこれから自分はこの教師の授業を何度となく受けるはずだ。そんな中で『先生の胸が気になって集中できません』などということになってしまいかけない。

「――むらくん」

というより現在進行形でそうなってしまっている。

――駄目だ、駄目なんだ！！　教師をいかがわしい目で見るなんて……。

と頭では分っているものの、体が言うことを聞かない。
まるで呪縛にかかったかのように、真耶の胸を目で追いつづける。

「織斑君！！」
「えっ！？　あっ、はい！？　なんですか！？」

「えっと今自己紹介をしてるんだけど『お』まで終わって次が織斑君なの。だからその……怒らないで」

真耶の一言で我に返る一夏。今までの自分の行いを反省するとともに、脳に刻み込んでいた映像を抹消していく。徐々に涙目になっていく真耶に慌てて謝り勢いよく立ち上がる。

入学式始まって以来最初の、そしてもしかすれば最後になってしまうかもしれない『男性』の自己紹介の始まりだ。

◇　◇　◇　◇　◇

秋穂は前を向いたまま一人の生徒を観察していた。否、おそらく一組の生徒はその生徒を除いて同じ事をしているはずだ。この雰囲気の中で後ろを振り向く勇気はない秋穂だがその確信があった。

相手はもちろん『世界で唯一ＩＳを使える男』織斑一夏である。

好奇、恐怖、動揺など生徒の心にあるものは全て異なっていたが、その中でも秋穂のものは他の誰も抱いていないことだった。

（……どっかで見たことあるような気がするんだけどなぁ）

茶色を帯びたセミロングの髪には青のカチューシャが着けられその仕事を無言で行っている。右側だけの三つ編みを指で絡めながら必死に記憶を辿っていく秋穂だが、その答えにはたどり着いていない。

そもそも一夏がＩＳを起動させここＩＳ学園に入学してくることは以前よりニュースで全世界の人間が知っていた。

『女尊男卑』などと一部では言われている今のこの世の中、彼の存在は世界で唯一女性と対等な立場にいるのだ。

大々的に放映され、今や彼の名前を知らぬ者はいないだろうとされるほどだ。

だが、いや、だからこそと言うべきだろう。秋穂はその顔に見覚えがあるような気がしてならなかった。

ニュースで初めて見るのではなく、確かに感じた懐かしさを簡単に捨てられずにいたのだ。しかしこうして直接彼の姿を見ても何も思

い出すことはない。

懐かしいと感じる以上、彼との間に何かしらの関係があるはずなのだが……。その様な経験はしたことがない。

「うーん……何でだろ……」

思わず漏れてしまった言葉にさっと辺りに目を配る。幸いなことに全員の視線が彼に集まっているために秋穂の声を聞いた者はいなかった。

はぁ、と一息ついた秋穂はその視線を一夏から横へずらす。

篠ノ之箒。このクラスにおいて唯一と言っていい。一夏のことを見ていない生徒だ。黙ったまま前を向いているため、秋穂からその表情は伺えない。

だが。

（なんだがわざとらしいんだよねー。『見てない』というよりは『見れない』って感じかな？）

なんにしても。と秋穂は心の中で思う。

一夏との関係があろうとなかろうと、所詮その程度のものでしかないということだ。

大切な思い出を忘れることはないだろう。

（篠ノ之さん覚えてくれてるかな？）

一夏の事は一先ず置いておくとしても箒の事はそうはいかない。本

当に短い間の事で、向こうにとっては何でもないことなのかもしれない。

それでも、自分が覚えている。

あの日、あの場所で。
彼女が差し出してくれた手を。
彼女がかけてくれた言葉を。

◇　◇　◇　◇　◇

許してほしい。俺はそんな凄い人間じゃないんだ。女子に突き刺さるように見られる中でペラペラと話せる人間じゃないんだ。

「織斑一夏です」

急に当てられさっきまでの映像を振り払った俺に言えたのは、自分の名前だけだった。

気の効いた台詞なんて全く出てこない。

あぁ、何だよこの沈黙。『もっと話せ』なんだがそんな風に聞こえてくる。いや、誰も話してないんだけどさ……圧力って言うか、無言だからこその威力があるというか。

パシーンッ！！

「痛いっ！！」
「お前はもうちょっとましな挨拶ができないのか」
不意に頭に感じた強烈な痛み。
た、確かに俺の挨拶は酷かったもしれないけど……って。えっ！？
「ち、千冬姉……」
パシーンッ！！
「織斑先生だ」
「だから痛――」
パシーンッ！！
「……すみません、織斑先生」
「分かればいい」
問答無用の実力行使。暴力による圧政。傍若無人の四文字が俺の知るなかで最も当てはまる人間。そして、俺のたった一人の家族。
織斑千冬がそこには立っていた。
パシーンッ！！
「お前、何か失礼なことを考えていたな？」
くそっ……ばれてる。何でだか俺の考えてることってばれるんだよな。
こうなったら仕方がない。何とか切り抜けるためにも……正直に言

おう。
決して後でばれた時が怖いわけじゃない。断じて違う。
「すみません。傍若無人だと――」
パシーンッ！！
「ずいぶんと正直だな。このくらいで許してやる」
許してやるって……千冬姉、世間ではそれを許したって言わないんだよ？
立派な社会人なんだから知ってるよね？
「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」
やっぱり傍若無人じゃないですか。
なんてことは口が裂けても言えない。さっき言ってこれだったんだ。本気で殴られたらたぶん頭を潰される。比喩表現ではなくて、わりとマジで。
はぁ……。一言言ってくれればいいのに。俺がどれだけ心配したと思って――。
パシーンッ！！
「織斑、早く席に着け」
「……はい。織斑先生」

◇　◇　◇　◇　◇

うわー。痛そう……。
ここに来て初めに千冬さんを見た今、思った事はそれだけだった。だって織斑君本気で痛がってるし、なんだかちょっと涙目な気もするんだけど。

初めて会った時に「黒い！！」なんて言わなくてよかった。言ってたら私、今頃どうなって――。
パシーンッ！！

「春日、なにか言いたいようだな。言ってみろ」
「……すみません。何でもないです」

うぅ……。何で？　これ痛い。凄く痛いよ。絶対駄目だって。一発で脳細胞五千個ぐらい死んでそうなんだけど。

織斑先生、もとい千冬さんが話し始めたせいか、周りの所謂『黄色い声援』は一応影を潜めている。織斑君はもちろんの事、私まで何故か受ける破目になってしまったあの出席簿アタック（私命名）。尋常じゃない痛さだった。それはもう、石で出来てるのかと思ってしまうくらい。

そんな光景を見た後だから皆怖がってしまっているんだと思う。まぁさっき見たあの様子だと、怒られたいからわざと余計なことを……なんて生徒がいないとも限らない。

千冬さん、凄い人気だったし。っていうか千冬さんの事知らなかったの私だけだったみたい。入学前の参考書を頑張って読んでおいてよかった。何度捨ててやろうかと思ったか数えていないけれど、捨てなくてよかった。

この空気の中で『千冬さんってどんな人？』なんて質問をすると多分怒られる。か知っていることを何から何まで全部話してきそうだ。

お喋りは嫌いじゃないし寧ろ好きなんだけど、さすがに千冬さんのことだけで何時間も話をしたくない。

それは千冬さんが嫌いだからじゃなくて、私が話すことがないから。

でも。

「さあ、ＳＨＲは終わりだ。諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」

こんな事を平然と言う千冬さん、なんだか素敵だしこうしていると何時間でもいい。私が話せなくてもいい。千冬さんの事がもっと知りたい。

もっともっと知って近づきたい。

少しだけ、そんな風に思った。

◇　◇　◇　◇　◇

ＩＳ学園は日本にあるここ一校である。それはつまりＩＳ操縦者を育成する学校が一つしかないことを意味し、結果何が起こるかというと。

（……授業、分んないよぉ）

入学初日、一時間目からの普通授業である。

秋穂は一限終了のチャイムが鳴ったと同時に机に突っ伏した。理由は単純。授業が難しいのだ。

机に頭を預けた状態で周りを見渡してみるが、秋穂と同じ状況の者はあまりいない。ともすれば、『意外と簡単だったね』などという戯言が聞こえてくる。

「はぁ……」

大きなため息をつくも、その状況が変わることはない。大きく変化した事といえば授業が終わり休み時間になったことで我先にと一年一組に大人数が詰め寄せていることだろう。

直接自分には関係のないことだが、そんな光景を見ながらそれでも秋穂は思ってしまう。

（こんなところに男子一人だなんて、大変だねぇー。まっ、でも男子にとっては嬉しいことか）

普通の公立中学に通っていた秋穂である。他の生徒よりも圧倒的に男子に対する耐性があった。

そんな彼女が思うことはあまり心配した様子ではないが、周りの『あんた話しかけなさいよ』なんていう言葉を聞いているとこのままではあの男子生徒は一人ぼっちになってしまうのではないか。

一人でいることに恥ずかしさを感じ、結果、屋上から身投げするのではないか。と様々な妄想が膨らんでいく。

そうでなくても。

――便所飯。

そのワードが頭の中に一際大きく現れ、自身がそうなってしまわないかと身震いさせてしまう。

「っと、こうしてる場合じゃない。篠ノ之さんに挨拶行かないと……」

大切なことを思い出し、頭を上げて立ち上がろうとする。

がそこで前方から声が聞こえてきた。今まで音の聞こえることがなかった一夏の席の方からである。

「……ちょっといいか」

あまりの驚きで秋穂はそちらの方向に顔を向けた。一夏が気になる、というのはもちろん理由の一つである。ニュースで見て、直に見て、覚えがないにもかかわらず一種の懐かしさを感じさせる少年。気にならないわけがなかった。

がそれはそれとして、もう一つ。こちらの方が本命だ。

つまり『誰が先陣をきったのか』ということに多大なる興味がわいたのだ。
別に悪いことではない。一夏ＩＳ学園の生徒であり、自分たちもまた同じ学校の生徒なのだ。交流を持つことなどいたって普通のことだろう。

だが、相手が男子となれば女子生徒にとっては例外である。

まずもってどのように接していいか分からない。
ＩＳは一夏を除けば女性にしか反応しない。ゆえにＩＳのことを学ぶ生徒及びＩＳ学園に通っている生徒のほとんどが女子校出身なのだ。

そんなわけであるからして、男子生徒に話しかけられる人物がいたことに驚きだった。

（って、篠ノ之さん！？）

「廊下でいいか？」

会話の細部までは聞こえないものの、どうやら箒が一夏に声をかけたらしいことは周りの雰囲気で察することが出来た。先導していく箒、慌てて後についていく一夏。箒の顔つきが険しいせいか、その場にいた生徒が左右に広がり道を空ける。

（凄い……モーゼの海渡りだ）

そんなくだらない事を考えた秋穂だが、その後ろ姿にまたしても懐かしさを感じた。
今回は漠然とした予感ではなく、はっきりとした記憶として。

「あーっ！！」

その叫び声にほとんどの者が反応する。一夏と箒のやり取りを見ようとしていたのだ、後ろからの突然の叫びに驚かないはずがない。

（そうだ。そうだよ。織斑君じゃない。何で忘れてたんだろ――）

あまりの叫びに皆が反応したが肝心の秋穂はというと周りのことなど全く見ておらず自分の世界に浸っている。

なぜ忘れていたのか。理由はたくさんあるだろう。だが、仕方がないといえば仕方がない。恋する乙女は一直線であり、周りのことなど気にしていられないのだ。

手を組み、頬をピンク色に染め、にやけた顔で、秋穂は叫んでいた。

「弾さんの親友じゃない！！」

第一話：入学式と再会（後書き）

第一話です。
秋穂ちゃんはなかなかに鋭い子だったりします。
まぁずばりの時もありますけど、たまたまのことが多いです。

そんなこんなでまたしてもマサムネ先生との会話です。

牡丹「どうしよう……早くも一夏が変態になってる」
マサムネ「ん？　別にいいだろ。もっとやれｗｗｗｗ」
牡丹「……ラジャ」

こんな感じで結構ぐだぐだやってます。
次回はようやくセシリアちゃん登場です。傲慢な金髪ドリ……ごほんっ、可愛いお嬢様になるように頑張ります。

第二話：誇りと宣戦布告

「ああ、その前に再来週行なわれるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

俺の地獄の一週間は、千冬姉のこの一言から全てが始まったんだ。

◇　◇　◇　◇　◇

「クラス代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点ではたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

へぇー。クラス代表か。なんだか面倒臭そうだなぁ。

ああいうのってやりたがる人とそうでない人がはっきりと分けられるよね。ちなみに私はやりたくない人。だって面倒だし、責任を負うのはちょっとね……。

千冬さんは『自他推薦は問わない』なんて言ってたけどやりたい人なんているのかな？

ほとんど皆が初対面だし、何より織斑君がいるし。

女子校育ちって結構面倒が多いって聞くから控えめな子が多いんじゃ……。

「はいっ。織斑君を推薦します！！」

そんな私の予想を裏切るかのように一人の生徒から声が上がった。
その言葉におもわず頷いてしまっている自分がいることに気がつく。
他人事だからこんな風に適当だけど、推薦される方の織斑君はたまったもんじゃないだろうなぁ、なんてことを考えながら言葉を発した生徒に目をやる。

周りからの賛同も受け、机の下でガッツポーズを作っているのが見えた。うわー。あの子確信犯だね。
織斑君は皆注目してるし、なんていっても千冬さんの弟。それだけの要素があればまず代表は間違いない。っていうかこの流れで意見を言える人がいれば尊敬に値するよ。

「他に誰もいないのか？　いないなら無投票当選になるぞ」
「ちょっ！！　俺はやりたいだなんて一言も――」
「自他推薦は問わないと言ったはずだ。他薦された者に拒否権などない。選ばれた以上覚悟をしろ」

千冬さん凄いなぁ。
自分の弟なのにあんなに厳しくして。普通だったら絶対に無理だよね。ただでさえこんな楽園（学校）に一人でいるっていうのに、その上クラス委員にまでされようとしているんだから。
私だったら絶対に庇ってるかも。『弟は忙しい』って一言で皆納得するだろうに。

そんな事を考えながらも私は何もしなかった。
織斑君には悪いと思うけど、他に誰か推薦できるような人はいない

し、私が自ら生贄になろうとも思わない。
それに何より、かなり面白そうだから！！
「待ってください！！　納得がいきませんわ！！」
そんな風に考えている時だった。しどろもどろしている織斑君を観察し、彼にクラス代表が決まろうとしたその瞬間。私よりも後方の席から甲高い声が響き渡る。
皆が一斉に振り返る。
そこにいた人は。
「そのような選出は認められません！！　大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！！　わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間も味わえというのですか！？」
……なんていうか。うん。
『まだこの世界に存在してたんだね』って言いたくなるような人だった。確かこの人、イギリスの代表候補生だっけ？
まぁ、気持ちは分らないでもないよ？
私もこういう選出の仕方は面白いとは思っても本人は迷惑だろうなって思うし。そのことに関しては何にも文句はないよ。でもさ、それは駄目じゃないかな？
そうやって人の心をがっしり掴むのは駄目なんじゃないかな？
「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを物

珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！！　わたくしはこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！！」

えっと、セシリアさん？　それともオルコットさんって呼べばいいのかな？
外国、それもイギリスの貴族の人をどういう風に呼んだらいいのか分らないけど、これだけは分っている。

「いいですか！？　クラス代表は実力トップがなるべき。それはわたく――」
「金髪ロールはないよ！！」

「……春日、何か言いたい事があるなら挙手をしろ」

「えっ！？　私ですか！？」

な、何で！？　私何かした！？　そりゃ、金髪ロールはないって思っちゃったけど、それだけだよ？
だってセシリアさん完全に金髪ロールなんだもん。三百六十度どこから見ても金髪ロールなんだもん。

それになんだか周りの視線がやけに私に向いているような気がするんだよね。『やっちゃったな』みたいな雰囲気がものすごく気まずい。

「こほんっ。とにかく、文化としても後進的な国で暮らさなければならないこと自体、わたくしにとっては耐えがたい苦痛ですの。これ以上わたくしに――」
「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。島国って、そっちだっ

て島国じゃねぇか。日本が遅れてる？　世界一まずい料理で何年覇者だよ」

空気が固まった。

というか空気は気体であって、固まった時点でそれはもう固体だから空気じゃなんじゃないかな。それに空気の主成分窒素だし、その窒素も液体にするのに－１９５，８℃まで冷やさないと駄目だし。ってそんなわけの分らないこと言ってる場合じゃない。

「あっ、あっ、あなた！！　わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

ほら。セシリアさん怒ってるよ。もうめっちゃ怒ってるよ。そうだよね。貴族……かどうかは知らないけど、気品とか見てるとそんな感じするし、そんな人の前で国を馬鹿にするのは駄目でしょ。

あれ？　でも、セシリアさんも日本が文化的に遅れた国だとか何とか言ってなかったけ？　一字一句合ってるとはいえないし、織斑君の爆弾発言でほとんど飛んじゃったんだけど、なんとなくそんな事を言ってた気がする。

「決闘ですわ！！」

あちゃー。やっぱりそうなっちゃうのか。ここから手袋を投げつけたりするのかな。

ん？　あれはイギリスであってたっけ？

「おう。いいぜ。四の五の言うより分りやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたら私の小間使い――いえ、奴隷にしますわよ」

「侮るなよ――」

それからも二人は色々と話しているみたいだけど、その会話が私の耳に入ってくることはなかった。だって千冬さんに顔が一瞬曇ったのを、私は見逃さなかったから。

本当に一瞬のことで、今ではもうさっきまでの千冬さんになっているけれど……。

そうだよね。弟を心配しないお姉さんなんていないよね。でも千冬さんは教師だから。だから優しくすることが出来ないんだ。

えこひいき、なんて誰も言わないと思うけど、そういうの織斑君は嫌いそうだもんね。たぶん千冬さんも。

千冬さんは織斑君のお姉さんを十五年やってるんだもん。彼の嫌うこととか分るよね。

心配じゃないのかな、なんて思っちゃった。後で謝った方がいいのかな。でも千冬さんに言っても『そんなことは思っていない』って言われちゃいそうだし。織斑君に直接言っても全然意味ないし……。

あー。もう！！　どうすればいいの！？　私、どうすれば――。

「春日、今のところもう一度読んでみろ」

「……えっと……」

いつの間に授業再開してたの？

織斑君も普通に椅子に座ってるし。あぁ、この問題、どういう解決法になったのか全然見てなかった！！　ってその前に今は目の前のことに集中しないと。

えっと確か、今からやろうとしていたのは各種装備の特徴だったよね。だから……。

うん、聞いてないのに分かるわけがないよね。

「すみませ――」

パシーンッ！！

「春日、授業は真面目に聞け」

「……はい」

謝ることさえ許してもらえないみたい。それにしても、本気で痛いです。千冬さん。

◇　◇　◇　◇　◇

「うぅ……」

放課後、机の上でぐったりとうなだれている生徒の姿があった。教科書を恨めしそうに見つめ、そしてまた大きなため息をつく。

「はぁ……」

こうなったのは誰のせいでもない。自分のせいである事は分かっていたし、言った事の対する責任があることも理解している。自分の行いに後悔はない。後悔はないが……。

「何でこんなにややこしいんだよ」

教科書を閉じて再びため息をつく。今日で一体何度ため息をついたことだろう。授業中についてしまったら最後、真耶には『な、何か問題がありますか！？』と泣かれそうになり、千冬には『いちいち煩いぞ。黙れ』と言われる始末だ。

さらに授業間の休憩時間は他クラスの生徒まで押しかけてくるのでまともに休める機会がない。

その中でも昼休みは特に酷かった。昼食をとるために学食へと向かったのだが、その後ろをぞろぞろと大量の生徒がついてきたのだ。それだけでなく一夏が歩くごとにその数は増えていき、大名行列さながらの集団と化していたのである。

それを一夏が認識したのは食堂に着いて直ぐのことだ。まずもって学食内にいる学生の数が少ない。もっとごったかえしているのかと思っていたが――ほとんどの生徒が一夏の後ろをついていたために――意外と空いていたのだ。

まさか学校の大多数の人間が後をついているとも知らない一夏は、普通に食券を買い、普通に注文し、普通に食べようとしていた。

だが、そこで事は発覚する。

大多数ではない少数派。この学校においても一夏に全く興味を示さない者も、たしかに存在したのだ。

そんな生徒にとっては、一夏のこの状況は『異常』と言うほかない。

「――っ！！」

「えっ！？　俺何かした？」

ただ歩く。たったそれだけの行為であるにもかかわらず、生徒たちは一夏――の後ろをついていく女子生徒――から離れていき、再び『モーセの海渡り』の現象が起こっていたのだ。

そんな事を全く知らない一夏は驚きである。

いくら男性に免疫がないからといって、いくら男性の地位が大きく下がったといって、これほどまでに避けられるものなのかと。

「はぁ……。って、えっ！？」

「やばいって！！　見つかったよ！？」

椅子に座り何気なく後ろを振り返った一夏は、そこにあった光景に先程からずっと避けられている理由を知る。

知るのだが……。

「ははっ……どうも……」

最早挨拶しか返せなかった。

（結局どこ行っても誰かがいるし、箒は助けてくれないし、俺の休息地はどこに……）

そんな場所など、今の段階でこの学校にあるはずがないことは一夏が一番分かっていることだった。

「ああ、織斑君。まだ教室にいたんですね。よかったです」

そんな一夏だったが呼ばれた声に反応して顔を上げる。そこにいたのは書類を片手に抱えた真耶の姿。平均よりも低く見える身長。そしてその胸にある大量破壊兵器に目をやろうとして何とか目を逸らす。

が、その場所が悪かった。何とか逸らした一夏だったが思いっきり真耶のことを睨んでいるかのような風になってしまったのだ。
真耶も教員とはいえ、男性に対する耐性がないことは初日にして既に発覚していた。
そんな状況の彼女にそんな事をすればどうなるのかは小学生でも分かる。

「ご、ごめんなさい……。その、怒らないで……」
「えっ！？　あぁ、怒ってないですから」

扱いが難しいなぁ、などと気の抜けたことを考えながらも真耶の説明を受けていく。
一夏の都合――主に日本政府が絡んでくる話――の事もあるからだろう、耳打ちしていた。

耳にかかる息というものは案外くすぐったいものなのだ。
それを長時間続けるものだから一夏としてはたまったものじゃない。

「あ、あの息がくすぐったいんですけど」

その様子を見ているクラス内外の生徒の反応はさらに敏感になっていく。
授業中でも妄想から帰ってこなかった真耶である。その妄想を実行に移してもおかしくない、とでも思われているのか生徒たちの目は見逃すまいと見開かれている。

（結構真面目な話し中なんだけど……）

耳打ちしているのでこちらの話が聞こえないのは当たり前だが、向こうの話は十二分に聞こえてくる。心の中で嘆息しながら真耶に言うと慌てた様子で一夏から離れていった。

「おっしい。もうちょっとだったのに……」

（だから真面目な話だって……）

いちいち突っ込んでいられない一夏だったが、ここにきて女子校生の妄想力を痛感したのだった。

「部屋は分かりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備できないですし、今日はもう帰ってもいいですか？」

「ああ、荷物のことでしたら――」

「私が手配しておいてやった。ありがたく思え」

「どうもありがとうございます……」

この後、五分ほど話し大体の説明を受けた一夏が向かった寮で待ち受けていたものは主人公にとっては最も大切なもの。なくてはならないものであり、初期装備されているもの。

つまり幼馴染のバスタオル一枚姿、というラッキースケベな展開だったのだが、それはまた別のお話。

そして、一夏が全国剣道大会優勝者の木刀の一撃を真剣白刃取りで辛うじて防いでいる中。

「もう嫌だ……。ここどこなの？」

春日秋穂は道に迷っていた。

「あれー？　校舎から寮までは五十メートルぐらいしか離れてなかったはずなんだけど……」

続々と帰っていく学生について行かずに探検しよう、などと思ったのが運のつきだった。

探検が始まってからわずか十数分で迷子になり、後は己の勘に従い彷徨い続けている状態である。

（さっきはここを西に曲がったから……）

コンパスを片手に彷徨うその様はまさに探検家といえないでもないが、滑稽である事に変わりはなかった。

そもそも彼女、春日秋穂はこれまでにも何度も道に迷っている。幼い時から、大きくなった今でも、何一つ変わらず方向音痴なのだ。何かで見たことのある『迷ったら北に行け』という言葉をそのまま信じたわけではないが、それをきっかけとしてコンパスを持ち歩くようになった。だが結果はこの通り。むしろ多くなった情報量を自分の中で整理できていない分、持っていなかった時の方が足取りは軽いといえるだろう。

「はぁ……。学校は大丈夫だと思ってたのに」

そんな彼女はどこでも迷子になるわけではない。家の近所ではもちろん迷子にはならないし、中学の時も最後の方は安定していた。

『新しい物好き、可愛い物好き』という彼女の性格が見知らぬ土地であっても存分に発揮されてしまうために道に迷っているのだ。

だが、いつまでも迷っているわけにもいかない。今となってはもう高校生である。言わば大人の仲間入りだ。

それを抜きにしたとしても夕食の時間に戻れなくなってしまうことは避けたい。楽しいことは大好きだが、怒られることは大嫌い。という典型的な子供だった。

「あれ？　ここってもしかして寮なんじゃ……」

春日秋穂。奇跡のような迷い方をするのが彼女の特徴であり、もはや性質とさえ言えるのだが、奇跡のような解決法が見えてくる性質も同時に身につけているのだった。

こうなった時の秋穂の行動は早い。一番近くのドアへ向かうと、いきなりノックした。

（迷った時は助けてもらう。これ、常識だよね）

「もしもーし。すみませーん」

「一体誰ですの！？　一度呼ばれれば分かりますわ」

子供のように扉を叩き続ける秋穂の行動に相当苛ついた様子で中から生徒が出てくる。

しなやかで見事な金髪は巻かれ、主人の気品をさらに際立たせる。白のネグリジェは彼女が白人であることも相俟ってその清純さを更に一段階上げる。何よりもその肢体。すらりと伸びた脚、整ったボディーライン、胸は日本人女子のそれを大きく超えた発達をしている。女である秋穂でさえ見惚れてしまうほどだ。

その見知った姿に、お互いに一瞬止まってしまう。

「あなた……確か同じクラスの春日さん、でしたかしら？」
「えっ！？　う、うん。そうそう。私、春日秋穂。セシリアさん覚えててくれたの？　ありがとう、すっごい嬉しいよ！！」

「同じクラスなんですもの。当たり前ですわ」
「それでも嬉しいよ。オルコットさん綺麗だし、可愛いし」

見惚れていたこと自体何も恥ずかしいことではないのだが、秋穂は焦ったように言葉を並べ思ったことをどんどん口にしていく。その言葉はどれもセシリアを褒めることばかり。無自覚でこれだけのことを言っているのだから彼女もまた天然と呼ばれる部類の人間であることに変わりなかった。

しかし一つ言うならば、褒められて嫌な人間はいないという事に尽きるだろう。

「それはそうと、わたくしに何か用でもありますの？　同室の方なら先程出て行かれたばかりですけれど」
「そうだ！！　すっかり忘れるところだった」

いそいそと部屋の鍵を取り出す秋穂。何をするのか、用事が何なのかさえ聞かされていないセシリアは待つことしか出来ずその場で立

ち尽くす。
部屋番号を何度も確認した秋穂はセシリアに向かって言い放った。
「この部屋に連れて行ってください！！」

◇　◇　◇　◇　◇

まず始めに結論から。
セシリアさんはとってもいい人だった。
「１０１２室、ですか？」
「うん、私ちょっと道に迷っちゃって。だから教えてくれると助かるんだけど……」
冒険してたからです。とはさすがに言えない私は、とりあえず迷ったことだけ伝えた。
何も間違ったことはしてないし、迷っちゃったのは本当のことだから。
大概の人はここで二通りに分かれる。『何してたの？』って聞く人と『嫌だ』って断る人だ。
別にどっちでもいいんだけどできれば前者であってほしい。聞かれるのは別にいいとしても、道を教えてくれないと私は帰れない。
だから答えを待ってたんだけど、私の予想なんて全く無視するかのように部屋の扉を閉めすたすたと歩いていってしまう。
「えっと……」

あー。これはあれか、第三の選択肢『放置』ってやつかー。寂しいなぁ。ここからどうやって帰るんだろう。また違う人に聞くしかないか。隣の部屋でいっか。なんて思ってたら不意にセシリアさんが戻ってきた。

「あら？　その部屋に行きたかったのではないの？」

「えっ？」

「いえ、わたくしはその部屋に連れて行ってと聞こえたものだから。聞き間違いでしたら謝りますわ」

困ったような表情のセシリアさん。

あれ？　理由も何も聞かないの？　ただで案内してくれるの？

「あ、あの、ごめんなさい。そこで合ってます」

おもわず敬語で話してしまった。セシリアさんは「よかったですわ」というと戻ってきた道を再び歩き、案内してくれる。

その後姿にまたもや見惚れそうになったけれど、置いていかれるわけにもいかず急いで後をつけて行った。

何で何も聞かないんだろう。

私の頭の中はそれでいっぱいだった。何も聞くことなく、というか何も話さないでただ案内してくれるセシリアさんの後姿はそれだけで既に格好良いんだけど、やっぱり気になるものは気になる。

自分の事をこういうのはどうかと思うけど、普通は警戒しないかな？　いきなり部屋を訪ねてきた相手が『部屋まで案内してくれ』なんて言ってきたら理由ぐらい聞きそうなものだけど。

「あの……」
「どうかなさいましたの？」
私の言葉でいちいち立ち止まって聞いてくれるセシリアさん。やばい。私が男だったら完全に惚れてるよ。

「何も聞かないの？」
「当然ですわ。言いたくない事の一つや二つ、誰でも持っているでしょう？　それとも聞いた方がよろしいかしら？」
「うっ……。それはそうなんだけど」
「困っている方がいて、わたくしがその力になれると言うのであれば、迷う余地などございませんわ。ましてや言いたくないことを無理やり聞こうだなんて、高貴な者がすることではありませんわ」

前言撤回。
セシリアさん。結構どころかめちゃくちゃいい人でした。
優しく微笑まれた日には、どんな男もイチコロだね、こりゃ。

だんだんとセシリアさんに慣れてきた私ははっきりとその体を見ることが出来た。

うん、エロい！！

白人さんって初めて会ったんだけど、とにかくエロい。キメ細やかな肌、長い脚、そして何より胸が大きい。
山田先生ほどじゃないんだけど、やっぱり外国の人は凄いね。私なんてちょっと発育のいい中学生に負けちゃうような慎ましやかな草原が広がってるから比べてみると良く分かる。

胸がないわけじゃないよ。ただ小さいっていうだけで……。でも大丈夫！！　この間テレビで『小さな胸の女性が好き』っていう男性が増えてるって言ってたし。

あっ、でも弾さんはどうなのかな。やっぱり胸の大きな人がいいのかな。うぅ、どうしよう。胸って遺伝だったりするのかな。でも私のお母さんは一般的なサイズだし。

弾さんが『貧乳好き』っていう属性？とかいうのを持っていてくれればいいんだけど。

「着きましたわよ」

どうでもいいこと、いや私にとってはこれからの人生のことだからとっても重要な事なんだけど。まぁそんな事を考えているうちにセシリアさんが振り返った。目の前の扉にはまごう事なき『１０１２室』の文字。

おお！！　凄い！！　疑ってたわけじゃないけど、こうもあっさり辿り着くと目の前のセシリアさんが天才なんじゃないかと思えてくる。

いや、セシリアさんはイギリスの代表候補生なんだから、それはもう天才だってことなんだけど。

「困ったことがあったらまた。言っていただければ力になれるかもしれませんわ」

教室の時みたいに気取った感じのない、優しい女の子がそこにはいた。優しくて、格好良くて、そして何より『可愛い』女の子が。

では、と言って部屋へ帰ろうとするセシリアさんを呼び止めた私は

こう言った。

「お礼にお茶でも飲んでいきませんか？」

◇　◇　◇　◇　◇

「イギリスの紅茶には遠く及ばないと思うんだけど……」

「そんなことありませんわ。とてもいい香りですもの」

私が淹れた紅茶をセシリアさんは上品に飲んでいく。まだ少し熱いはずなのに、そんな事は微塵も感じさせない見事な飲みっぷりだ。紅茶に対して『飲みっぷり』なんて言葉を使うのはおかしいけど、音一つ立てない。

でも……じゃないね。だからこそ、かな。

そんな表情の一つ一つが、とっても可愛い。そこいらのモデルよりずっとだ。

もしかしたら向こうにいる時はそういうお仕事をしてたのかもしれない。

「ふぅ。美味しかったですわ。そろそひゃっ！！」

セシリアさんが急に高い声を出す。私が急に背中に触ったからだ。指先で肌の感触を確かめ、その弾力を感じ、そのまま背骨に沿って下へ下へと進んでいく。

「か、春日さん！？　何をなさって――」

「秋穂でいいよー。私もセシリアちゃんって呼ぶから」

カップをテーブルに置いてセシリアちゃんがベッドに腰掛けて――椅子もあったけど、二人は座れないので私の使うベッドに座ってもらった――ほっと一息ついていたから良かった。飲んでる最中だったらびっくりして気管の方に入ったかもしれないし。

後ろに回り私が何をしているのか分かりかねているセシリアちゃんはただただ戸惑うばかり。

そんな何気ない仕草が、私の中の『何か』を激しく震わせる。

「セシリアちゃん。可愛い」

「ちょっ、一体どうしひゃっ！！」

一番下、腰のところまで来るとまた首筋のところまで今度は上っていく。強すぎず、それでいて弱すぎない。指に返ってくる感触を感じながら私はセシリアちゃんの耳元に口をもっていく。

「セシリアちゃん、可愛い」

「――っ！！」

耳元で呟かれたことがないのかな。セシリアちゃんはビクッと体を震わせて硬くなっていく。

そんな体をほぐすように、私は頭を左肩に乗せ、彼女に抱きつく。

左手は彼女の足の上に、空いている右手はセシリアちゃんの頬へともっていく。

セシリアちゃんはベッドで座っている状態。私は後ろから彼女に寄りかかるように抱きついている状態だ。

座っているからこの状態では太股しか触れない。だから、というわけではないけど膝の方から体の方へと今度は戻っていくことなく優しく優しく、跡なんかがつかないように一方通行で触っていく。

「ちょ、ちょっと――」
「秋穂って呼んでくれなきゃやだよ？」
「んっ。み、耳元で話すのは……」

「セシリアちゃんくすぐったい？」
「いや、その……ひゃぁ！！」

頬から離し、その右手を無防備なお腹の方へともっていく。下から撫でていき胸にまで到着すると優しく細心の注意を払い、形が崩れてしまわないように大きな胸を持ち上げてみる。
ずっしりと重い。私なんかじゃ一生かかっても到達出来ないんじゃないか、と思ってしまうようなものがそこにはあった。

普段髪に隠れている首筋に舌を這わせていく。お風呂にはもう入ったのかもしれない。せっかく綺麗にした体を私の舌で汚してしまうのは少し心苦しいけど、仕方がない。
セシリアちゃんが可愛すぎるのが悪いんだ。

「胸、大きいね。どうやったらこんな風になれるの？」
「あっ、秋穂、さん。ちょっと、んっ、あっ……」

「肌も綺麗。こんなにすべすべしてて、いつまでも触っていたくなるね」
「はぁ、はぁ……。秋穂さん……」

服の上からでも十分に分かるけれど、やっぱり物足りない。脚に直

に触れている分、右手がもっと触りたいって言ってくるのが分かる。
手を下から入れて徐々に上っていく。
触れれば触れるほどセシリアちゃんが可愛い声を出してくれるから止められない。

首の付け根から進んでいた舌は首を何度も行き来した後に耳へと移っていく。耳の後ろから耳たぶにかけて、じっくりと時間をかけて進んでいく。
左手は既に内股へと進んでいて、触っているのは私なのに逆に包み込まれているんじゃないかと思うほどの柔らかさを感じ取っていた。
部屋には誰もいない。私とセシリアちゃんだけの空間。
セシリアちゃんの可愛い声と、私の唾液のぴちゃぴちゃいう音だけが辺りを占めていく。

どんどん加速していく。
もう今自分がどこを触っているかなんて分からない。セシリアちゃんの柔らかさを全身で感じて、気付けば二人ともベッドに倒れていた。

「はぁ……はぁ……」

セシリアちゃんの荒い呼吸。たぶんこんな事をされたことがないんだろう。息は荒いのに、その目はどこかとろんとしていて、普段の彼女の鋭さ、堅苦しさ、なんてものはどこかにいってしまっていた。
私の目が、倒れた時に乱れたんだろうセシリアちゃんのお腹にいく。
露わになったお腹、その真ん中にある可愛いおへそに顔を近づけ。

「あぁっ。そこは……」

「んっ、あっ、ちゅっ……」

「秋、穂さん。もう……これ、以上んんっ！！」

おへそを舌で弄るだけじゃない。引き締まったウエスト。それらを丁寧に、そして存分に味わうと、今度は体の中心を通るようにゆっくりと舌を這わせていく。

半分私が上にのっかている状態だけど、そんなことは気にしない。舌を進めるごとに可愛い声が聞こえ、もっと聞きたくなって少しだけ捲れていたネグリジェに手を伸ばす。

でも。

「どうして、セシリアちゃん」

「はぁ……はぁ……。秋穂さん、もうよろしいでしょ？　こんなこと――」

可愛いセシリアちゃん。イギリス貴族のプライドが邪魔してるのかな。

もう何がなんだか分からない。ただ、もっと先に進みたくて。セシリアちゃんの表情が可愛すぎて。

何を言われているか分からなかったから、綺麗な口を私の口で塞いだ。

塞ぐだけじゃない。セシリアちゃんの体と心がほぐれるように舌を入れ、絡ませる。

二人の間を行き来する唾液。絡まりあう舌と体。セシリアちゃんの動きはぎこちないけれど、それだけで十分。

「んっ……」
「くちゅ、くちゅ……」
絡まりあう音だけが耳に入ってくる。それ以外は何も聞こえない、というよりそれ以外の音は何もいらない。
舌を、手を、脚を。絡ませ、離し、再び絡ませる。舌と舌を唾液が橋渡ししてくれるけど、離れた途端にまた合わせたくなって。
何もかもぐちゃぐちゃで、セシリアちゃんの顔を見るとその綺麗な顔を汚してしまっている私の唾液に目がいって。
セシリアちゃんもぐちゃぐちゃなんだけど、その姿がたまらなく愛らしい。
「セシリアちゃん、セシリアちゃん」
「はぁ、んっ……んんっ……あっ、はぁ……」
今が何時か分からない。知らなきゃいけないだろうし、知っていて損はないだろうけど、そんなものはいらない。
今の私の全てはセシリアちゃんであって、それ以外は何もいらない。
その後どうなったのか良く覚えていない。たぶん意識を失ったんだと思うけど。
気がついたら既に次の日の朝になっていた。

第二話：誇りと宣戦布告（後書き）

すみません。まず始めに一言。

……どうしてこうなった？

もう自分でも分かりません。あれです。たぶん直前に『真剣で私に恋しなさ〇』を観たのが原因です。まゆっちが可愛すぎたんです。

ともあれ、当初の予定通り？セシリアちゃんを可愛く書くことはできた気がしないでもありません。

まぁ最初の一文はぶち壊されてますけど……。

原作大好きな人はすみません。
原作ブレイクはほどほどにします。

次回はしっかり戦います。
秋穂ちゃんにも正気に戻ってもらいます。

と、いうわけで。たくましき友人マサムネ先生との一時。

牡丹「なぁ」
マサムネ「ん？　突然なんだ？」
牡丹「正純のパンツ見たかったよな」
マサムネ「……」
牡丹「あれ？　そう思わない？」

マサムネ「……新聞に載ったら『いつかやると思ってました』って言ってやるから安心しろ」

彼との仲はいいです。いい……はずです。

というか、犯罪はおかしません。

次回もよろしくお願いします。

第三話：擦れ違いと仲直り

えっと……。
現在時刻確認。午前七時半。

「夢……なわけないかー」

時計で時刻と日付を確認した私はとりあえずベッドから起き上がって背伸びをする。うん、これをしないと朝が来たって感じしないよね。朝日を浴びながらの背伸び。いいねー。季節が春っていうのもあるよね。
これが冬だったら、こうはいかないんだよね。寒いし、布団から出たくなくなっちゃう。

ってそんな事を暢気に考えてる場合じゃないんだよね。

このあたりで現実に戻っといた方がいいかな？
やっぱりそうだよね。いつまでも逃げ切れるような問題じゃないし、自分が招いたものなんだから。

「すぅー。はぁー。すぅー。はぁー」

形だけでも深呼吸。こういう時は落ち着くことが一番だ。
よし、寝ぼけた頭に酸素がいきわたっていくね。そろそろいいよね。
さて。

「うぅ……どうしようー！！　もう無理――！！」

朝一番から、隣の部屋の人なんか構うことなく――相部屋の人は既

にいなかった――本気で頭を抱えて叫んでいる少女がいた。

――私だった。

時間は午前七時四十分。

十分もの間叫び続けていた私だけど、とくに隣の部屋から苦情がくる事はなかった。

どうしてか同じ部屋の人ももういないし、もしかしたら登校時間が早い人なのかもしれない。

そんな風に考えたりもするけれど、正直今の私はそれどころじゃない。

つまり。

「セシリアちゃんにどんな顔で会えばいいんだろ……」

その事でいっぱいだった。

可愛いもの。それが私の大好きなものだ。人形でも、ぬいぐるみでも、子供だましの玩具であっても、それが可愛いものならば何だって関係ない。

可愛いものが好き。ただそれだけだったのに。

「うぅ……セシリアちゃんのせいでもあるよ……」

授業の準備をしながらも頭にあることはそればかり。どんな風にし

て謝ればいいのか全く分からない。
その可愛さのあまり暴走して行き過ぎちゃうことはよくあった。あんまり可愛かったから一つのぬいぐるみを取るのに必死になってUFOキャッチャーで一万円以上つぎ込んだ事もあった気がする。
その時は友達も一緒にいたし、あまりにも私が取れないから同情した店員さんのおかげで二万円までは使わなかったんだけど……。
さすがに人はまずいよね。
うん、自分でもそう思う。っていうか、セシリアちゃんに訴えられたら私捕まっちゃうんじゃ……。
え？　もしかしてIS学園に入学して一日目に逮捕されちゃうの？
ど、どうしよう。ありえない話じゃないよね。だってセシリアちゃんだし。いや、これはセシリアちゃんじゃなくても訴えるよね。
私でもいきなりあんなことされちゃったら訴えるよ。
「はぁ……」
考えても仕方がない。セシリアちゃんにちゃんと謝って許してもらうしかないんだし。
そう思って食堂までの道程を歩いていく。幸いなことに食堂に行こうとしている人は私だけじゃないようで、次々と扉が開かれ生徒が出てくる。
ただついて行くだけなんだけど……。その中で一番足取りが重たいのは、当然のことながら私だった。

◇　◇　◇　◇　◇

（はぁ……本気でまずいよ……）

朝食が終わり、時間があまり残されていないためにそのまま教室に向かい授業を受けているのだが、秋穂の頭の中にはほとんど授業の内容は入っていなかった。

頭の中を巡っているのは昨日のセシリアとのやり取りだ。自分がしてしまったことに反省はしているが後悔はしていない。その時はそうしたいと心の底から思い、純粋な気持ちでもって向き合っていた。

だが、それはあくまでも秋穂側の言い分でしかない。セシリアがどう思っているのか、何を思っていたのか、秋穂は何も知らないのだ。

方法は簡単だ。セシリアに謝罪するとともに昨日の事について話を聞けばいいのだ。そうすればセシリアの考えていることの何割かは理解することが出来るだろう。

だが当然のことながら、そんなことが出来るはずもない。出来るのであれば起きて早々にセシリアの部屋まで出向き、その場で全てを済ませてしまえばいいのだ。

「そんなに難しく考えることはありませんよ。そうですね。たとえば皆さんブラジャーをしていますね――」

（はぁ……もう二時間目終わっちゃったよ……）

毎度のことながら、真耶の例えは女子特有のものばかりで――ＩＳは本来女性しか扱えないものであり男子が授業を受ける事はまずない。そういう意味でも、授業に慣れていれば慣れているほど『男がいる』という状況では多少なりとも授業に支障がある――その度に千冬の叱咤が飛んでいた。

が、そんな事を気にすることが出来ないほどに秋穂は焦っていたのだ。
時間が経てば経つほどに気まずさは増していく。セシリアの席は秋穂よりも後ろであるために普通では見ることが出来ない。
それでも頑張って見ようとするのだが。

パシーンッ！！
「春日、授業に集中しろ」
「はい……すみません」

千冬の容赦ない妨害、もとい指導のおかげで実行することは出来ずにいたのだった。

一方、そんなクラスメイトの葛藤など微塵も知らない一夏は自分のことで精一杯だった。
二時間目が終わった時点で既に限界を迎えようとしていた。
単語の予習の成果が出たのか、昨日のような惨劇ではなくなった。
が、そこまでだった。
根本的に理解不能な部分が出てきているのだ。何度やっても解けない数式に挑戦している気分になる。

ＩＳ学園の入学試験。あの時の感触は未だに覚えている。初めて触れたにもかかわらずどこか懐かしさを感じた。
その感覚を覚えてはいるのだが……。

（何で俺ＩＳに乗れるんだろう……）

結果、一夏の頭にあるものは『なぜ自分がＩＳを動かすことの出来るのか』という原点に返るようで自身にとって、また全世界にとって一番肝心な問題だった。

織斑一夏。ＩＳ学園唯一の、否世界で唯一のこの男に休憩時間などというものは存在しない。
ＩＳ学園は公立の学校だ。もちろんしっかりと休憩の時間は設けられている。
しかし。

「織斑君、ちょっといい？」
「ねえねえ、質問いいかな？」
「今日の放課後遊びに行こうよ！！」

これらの言葉が四方八方から飛んでくるのである。人間である一夏の耳は当然ながら二つしか付いておらず、聖徳太子のような素晴らしき特技も持ち合わせていないため、ほとんど何を言っているのか分からなかった。

こんな時に一声かけてくれれば、と一夏は心の中で思うものの、頼みの綱である箒は動こうとはしない。
どころか、むすっとした表情で一夏を時折睨んでいるほどだ。

一夏には『怒っている』程度の認識しか出来ない。
一体何がそこまで怒らせるのだろう、などと暢気に考えようとする一夏だが周りの声にかき消されてしまう。

（……勘弁してくれ）

入学してから何度目になるか分からない、それでいてこれから何度言う事になるか分からない言葉を思わず心の中で叫ぶのだった。

◇　◇　◇　◇　◇

……やばい。

本気でやばいよ。

もうすぐ放課後になっちゃうよ！？　私今日何をしてたの！？　もう嫌だ……。
大体セシリアちゃんにも責任があるんだよ。その、悪いのは全面的に私だけどさ。それでも何か方法はあったと思うんだよね。
例えば……。そう！！　ＩＳを移動させるとか！！　私が死んじゃうけど。
で、でも。セシリアちゃんは代表候補生なんだから、死なない程度に手加減とか出来るよね？　うん、出来るよ。だってセシリアちゃんなんだもん。

……人のせいにするのはやめとこう。これ以上はないかもしれないけど嫌われたくないし。

でも実際問題、会って何を話すの？　って感じだよね。

『昨日はありがとう』

これはない。

ないっていうか、もう終わってるよ。ただでさえ終わってるのに何開き直ってるの？

そんなんじゃなくて。もっと他にちゃんとした言葉があるはずだよ。

『気持ち良かったね』

……。うん、なんていうか。『あれ？　もしかしてちょっと面白いんじゃ』なんて思った瞬間にこれだよ。

自分のことだけどさ、私がセシリアちゃんなら一言目からブチ切れちゃうよ。しかもそこまで分かってて考えたのに面白くないって……。そりゃ、自分にギャグセンスがないことぐらい分かってるよ。

分かってたけど、さすがにこれは酷い。

もう考えるのはやめておこう。どうせ慌てちゃうに決まってるし、そんな状態じゃ言葉を考えてたって意味ないもん。

誠心誠意謝るしかない。

って、ここまではもうだいぶ前――大体五時間ぐらい前――から決

まってることなんだよね。問題はここから。『どうやってセシリアちゃんに話しかけるか』ということなんだよね。セシリアちゃん、休み時間になったら織斑君のところへ直行しちゃうし。

セシリアちゃんと織斑君の時間なんだから好きに使ってくれて全然構わないんだけどさ……。今日この時間に限ったことで言えば織斑君にちょっと悪いけど、いなくなってほしい。

嫌いだから、とかいう理由じゃなくて彼の周りは人が多すぎる。話なんてしようものならクラスだけじゃなくて他の人たちにも知られちゃう。いや、クラスの人にも聞かれちゃいけないんだけど。

「今からちょっとよろしいかしら？」

「え……ってえぇ！？」

「なにか用事がおありなら別に今日でなくても――」

「何もないよ！！　うん！！　全然、全く、完全に暇だよ！！」

ま、まさかセシリアちゃんのほうから声をかけてくれるなんて。考えてもいなかったから返答がしどろもどろ、というか変な日本語を使った気がする。全然、完全はまだしも、全くって何？

私って所謂『可哀想な子』なのかな。

認めたら楽になるかなー。なんて思ったけど普通に悲しくなるね。

悲しいというか。なんというか。うーん、私の知ってる言葉じゃ言い表せない……。ああ、こういう時のことを言うんだね。『歯がゆい』って。

「わたくしがお呼びした理由、お分かりですわよね？」

「それ……はい。」

大人しくついて行く、っていっても見た目はそうだってだけで私の内心は凄く緊張していた。

だってあんなことがあった翌日だし。完全に私が悪いわけだし。

何を言われるんだろ。もしかして『責任を取ってください』とかだったりして。いやいや、何考えてるの私。こんな時までふざけてる場合じゃなよ？　私これから（社会的に）殺されちゃうかもしれないんだよ？

あぁ。こんな大事になるだなんて思ってなかったよ。だってさ、ほんの出来心だもん。

最後までいく気なんかこれっぽっちもなかったんだよ。

……凄いネガティブになってるね。っていうか、なんだか痴漢しちゃった人の言い訳みたいだ。もちろん痴漢なんて見たこともしたこともないから分からないんだけど、なんだか言ってそうだよね。

『相手が誘ってきたんだ』

そこまで頭の悪い言い訳をする人はさすがにいないか。

「昨日のことですが……」

やばい！！　きちゃったよ！！　余計なこと考えてる場合じゃないよ！！　とりあえずセシリアちゃんの話をよく聴こう。うん、それがいい。そこに何か隠されてるかもしれないし、隠れてなくても話を聞き逃すわけにはいかない。

「昨日は黙って帰ってしまってすみませんでしたわ。ただ、その…

…いきなりだったものだから」
「……はい」
「本当に申しわけありませんわ。気を失ったあなたをそのままベッドに寝かせて帰るだなんて、いくら襲われる可能性が低いとは言え非常識にも程がありましたわ」
「……ん？」
あれ？　なんだか話がずれてないかな？　確かに朝起きたら布団の中に入ってたけど……。今はその話じゃないよね？　流れ的には完全に私が攻められる側のはずだよね？
なのに……何でセシリアちゃんが謝ってるの？
「わたくし、その……恥ずかしながら動揺していましたの。本当になんと言っていいか」
「いやいやいや！！　ちょ、ちょっと待ってよ！！」
「待つもなにもありませんわ。あのような行為、貴族としていえ、人として恥ずべきことですわ」
凄い剣幕で詰め寄ってくるセシリアちゃん。私が悪いのに、私を一人寝かせて部屋に帰った事でこんなに。
凄く申しわけなさそうにしてるし……。
ってそんな事思ってる場合じゃない。今だよ。今のこの流れならさらっと謝れそうなんじゃないの！？　セシリアちゃんは私に謝りたくて、私もセシリアちゃんに謝りたい。
謝れば済むって話じゃないのは分かってるけど、今なら謝りやすい気がする。

ううん、違う。今を逃したら『謝れなく』なっちゃうんじゃなくて、『謝らなく』なっちゃうんだ。セシリアちゃんは優しい。優しいだけじゃなくて、ほとんどのことを自分一人で出来る。
そんな人だからこそ、今じゃないと謝ることを私がしなくなっちゃいそう。

そんなの、嫌だ。ずっと友達でいたいし、仲良くしたいし。

「ごめんなさい！！」

セシリアちゃんの言葉を遮るようにして謝る。頭を下げて、精一杯誠意が伝わるように。

返事がない。足音は聞こえなかったから立ち去ったわけじゃないと思うんだけど。
やっぱり怒ってるから？　それとも他に何か別の理由があるのかな？　さっきのセシリアちゃんの様子を見てると、『何で謝られているのかが分からない』なんて事にもなってるかもしれないけど……。

それはないって分かる。
私が悪くならないように謝ってくれたんだ。私のために。

「昨日は、その、本当にごめんなさい」
「もうよろしいですわ。お顔をお上げになって」

「でも……」
「わたくしの祖国でもあなたのような方はたくさんいますし、恥ずかしい事ではありませんわ。それにちょっと……」
「ちょっと？」

「えっ！？　いえ、その……。いい、いきなりは良くないと思いますわ。ああいうことは愛し合っている者同士がすることだと……」

捲し立てるように話すセシリアちゃんの表情はとても焦っていた。

何でだろう。ここは私が焦るところだよね？

相手に焦られると、こっちは逆に冷静になれるんだね。本当にどうでもいいことだけどまた一つ、私の知識が増えた瞬間だった。

――やったね！！

って喜べるはすがない。

だってセシリアちゃん、とてつもない間違いをしてるだもん。このままだと、『私』という存在を誤認されてしまう。

そんなことないって伝えなきゃ。

私は――。

「セシリアちゃん、私ね……」

「わざわざ言わなくても分かっていますわ。ただ……」

「ただ、なに？」

何？　だなんて、何で聞いちゃったんだろう。

そんな事聞くことに意味なんてないのに。ただただ誤解が深まってしまうだけなのに。

違う。聞きたかったんだ。
セシリアちゃんの口から自分がどう思われてるのか。嫌われていないのか。ちゃんと聞いて、安心したいだけなんだ。
分かってる。そんなことに意味はない。意味なんてないし、もし嫌っていてもセシリアちゃんはきっと言わない。
セシリアちゃんに限ったことじゃない。

『あなたが嫌いです』なんて誰だって言わないよ。そんな事しちゃったら、この後の学園生活で色々と面倒なことが起きるもん。

「わたくし、良く分かりませんの。あなたと会ったのも昨日が初めてですし……。だからその、お友達から――」
「私は普通に男の子が好きだよ！！」

「……」
「あ、あの。セシリアちゃん？　何でいきなり黙っちゃうの？　え！？　私何か悪い事言った？」

明るく返す。本当の気持ちなんて誰にも分からない。
でも、口だけでも。ううん、そう言ってくれた事自体がとっても嬉しかった。

嬉しかったのはいいんだけど。
なんだかセシリアちゃんが黙り込んじゃった。下を向いて……あれ？　もしかしてちょっと方が震えてない！？　いや、もしかしてとかじゃなくて完全に震えてるんだけど！？

「い、今。あなたの言葉を聞き逃してしまいましたわ。もう一度言

っていただけないかしら？」
「あ、あの。セシリアちゃん！？」
「いいから言いなさい！！」
めっちゃ怖いよ！！　もしかしなくても怒ってるよ！！　こんな状況になるって分ってたはずなのに。いざこういう状況になるとめちゃくちゃ緊張するよ。いや、緊張って言うか……恐怖？
「早く言いなさい！！」
「は、はい！！　あの、私はお、男の子が好きです」
何で私こんなこと言ってるの！？　男の子が好きですって、ただの男好きの発言だよ！！
男好きの人はこんな事言わないだろうから、ただの可哀想な子だね。
いやー。セシリアちゃんマジで怒ってるよ。うん。
「そ、そうですか。では説明していただけますわよね？　き、昨日のあれはな、ななっ何だったのでしょうか？」
「あのですね、その私可愛いものに目がないっていうか……」
ここではっきり言っておかなくちゃ。私は安全だって思ってもらわなくちゃ。
だから、というわけでもないんだけど。私ははっきりと言った。
それはもう、第三者から見ればはっきりといいすぎだと注意されてしまうほどに。
「ぶっちゃけて言うと、『可愛い』セシリアちゃんと遊びたかったの。ちょっと方向性がおかしくなっちゃっただけって言うか、セシ

リアちゃんも可愛い声出してたからお互い様って言うか――」
「つまりわたくしは『遊ばれていた』ということですのね？」
「遊ばれたって――。そういうつもりじゃないよ！？　そのなんて言うか……」

あれー？　どうしてこうなっちゃうの？
それになんだかセシリアちゃんの言ってることが正しく感じてくるよ？

私、遊んでたの？
そりゃ、遊ぼうと思ってたのは事実だし、そのために部屋にも寄ってもらったんだけど……。
遊ばれたって表現はどうかなー。なんてことを思ってしまう。
とりあえず言い訳を考えないと。って、言い訳の時点でもう駄目じゃん！！

「ふふっ……」

不意に聞こえてきた笑い声に反応してしまう。そこには当然、笑い声を発したセシリアちゃんがいるわけだけど。
笑い声？　なんで？

「もうよろしいですわ」
「……え？」

「反省もしておられるようですし、行き過ぎてしまう事など少なからずありますわ」

優しい……。もうこの人、聖女だよ。

でもここで「いやー。中学のころにも同じようなことしちゃって、裏で後輩からちょっと有名人になったり、先輩と一悶着あったんだよねー」なんて言った暁には――。

「あなたとの付き合い方を改めた方がいいように思えてきましたわ……」

「えっ！？　何？　ごめんなさい。聞いてなくて」

「なんでもないですわ。それでは秋穂さん。ごきげんよう」

今、『秋穂さん』って……。

友達って認めてくれたってこと、だよね！！

「また遊ぼうね、セシリアちゃん！！」

「――っ！！」

えっと……？

なんだかものすごい勢いでセシリアちゃんが走って行ったんだけど。

私、何か悪い事した？

してないよね。うん、してない。たぶん用事があったんだよね。さてっと、私もそろそろ帰らないと――。

そこで私の思考は止まってしまった。大切なことを思い出したから。

何で気付かなかったんだろう。ここまでの道程を考えれば分ることだったのに。こんなことってあるんだね。

もう一周回って笑いたくなるよ。

「ここどこなの？」

知らない場所で放置された私は、『何もしなくても迷う』という特性まで身につけていたみたいだ。

◇　◇　◇　◇　◇

秋穂は彷徨った。

自分のいた場所が分らない。ただそれだけのことで常備している地図とコンパスは使い物にならなくなってしまったのだ。

ただし、前にも言った通り秋穂の方向音痴は今に始まった事ではない。本人も――迷ってから思い出すという点を除けば――自覚している。迷い、困っている状況ではあるが本人としてはそこまで焦っている事態ではないのだ。

それに加えて地図の使えなくなった秋穂の足取りは比較的軽い。コンパスだけを見ればいいのだ。

ごちゃごちゃと余計な情報が入ってこない分、悩む必要もなかった。

（学校の中なんだから適当に歩いてもそのうち着くよね）

挙句の果てにはそんなことまで考える始末。一向に方向音痴が治らないのも頷けた。

頼りになる人がいない以上、頼れるものは己のみ。そう意気込んだ矢先のことだ。

秋穂の前を部活動に精を出す生徒が通り過ぎていく。あれは何部だろうか、と考えている間に生徒たちは姿を消してしまう。急いでいるので当たり前だ。こんなところに生徒がいたとしても、自分たちの知り合いでなければ他の部活動だと思うだろう。

当然といえば当然だが、秋穂に声をかけるものは誰一人としていなかった。

（適当に歩いててそのうち着く……よね？）

自身の言葉が疑問系である時点で既にその賭けには負けているのだが、認めたくないだけか、はたまた本気で信じているのか、秋穂は足を止めることはなかった。

辿り着いた部活全てが活動中であるためになにも聞けず、辿り着いた中で唯一話すことの出来た整備科の眼鏡をかけた青髪の少女には『……邪魔』の一言で一蹴されてしまう。

そんな秋穂が辿り着いた時間的にも最後となるだろう場所、そこは。

「故に正当だ！！」

知った声が聞こえてくる、剣道部の更衣室だった。

「失礼しま――」

「ふふっ。い、いや浮かれているわけじゃないぞ。これは一夏の訓練のためであり、一夏が『どうしても』と頼むからやっているだけであってだな。私の個人的な感情とは――」

今までの経験からいきなり入っていくという行為は、部活動の中断を意味することを十二分に理解していた秋穂は恐る恐るといった感じで入っていく。
が、そこで足を止めてしまう。
あまりにも大きすぎる声での独り言が聞こえてきたからだ。
突然入っていってもいいのだろうか。今入っていけば彼女――箒に恥をかかせてしまうのではないか。そんなことが頭を過ぎり、秋穂に次の行動をとらせない。
「こ、こうしているのも一夏が頼むからであってだな。決して私からではないのだ。私はただ同門のよしみで鍛えなおしてやっているだけであって――」
（し、篠ノ之さん……言い訳なんだろうけど、本音が駄々漏れだよー）
心配そうに聞き耳と立てる秋穂。着替えているのだろう、衣擦れの音が聞こえてくるが箒の独り言はとどまるところを知らず、どころかさらに加速していき一人芝居を始めてしまうほどだ。
そんな様子の箒に声をかけられるわけがなく。
――急いでその場を立ち去ろう。
それが秋穂の思いだった。ここに箒がいるということは他の剣道部員も近くにいるだろう。挨拶がまたもや先延ばしになってしまうことはいただけないが、それとこれとは別問題である。

（早く出ないとっ――っ！！）

だが、見つからないようにしゃがんでいた事があだとなった。突然走り去ろうとした体についていけるはずもなく、自分で自分の足を引っ掛けてしまう。

（や、やばい！！　ここで倒れたら……）

確実にばれる。警戒され、挙句の果てには変質者呼ばわりされるかもしれない。だから音を立てることも出来ず、転んでしまうなどもっての外だ。

しかし人生はいいように転ぶものばかりではない。どちらかといえば悪いほうに転ぶことが多いくらいだ。

具体的に言うならば、訓練していない女子学生が転びそうになったところから体勢を立て直すことなど不可能に近い、ということだ。

「うわっ！！」

大声と共に前に転んでしまう秋穂。顔面から突っ込む形でうつ伏せになった状態で動けずにいた。顔が痛いということももちろん理由の一つではあるが、今この状況において他の理由などありえるはずがなかった。

（うっわー。やばいよ……。どうしよ。このまま動かないままやり過ごせるわけないし――）

まるで人形の如く、その場で固まってしまう秋穂。前を見上げることすら出来ず、というより、今のこの気まずさを何とかしてほしい

気持ちでいっぱいだった。

箒が騒いでくれたのであれば、まだ対処のしようがあったというものだ。こちらの身分を明かし、怪しい者でないことを証明すればいい。可能性は低いかもしれないが、箒が秋穂のことを覚えている可能性だってある。

しかしこの状況はお互いにとって悪かった。

秋穂が盗み聞きしていたことは一目瞭然であり、恥じらいが原因かどうか分らない。だが、箒は何も言ってこないのは揺ぎ無い事実だった。

そんな中で秋穂が選択したもの。それは。

「痛かったー。あっ、篠ノ之さん、こんにちは。篠ノ之さんって剣道部だったんだね」

わざとらしすぎる誤魔化しだった。

箒の顔がどんどんと羞恥で赤く染まっていく。肩もプルプルと震え、今にも爆発してしまいそうなほどだ。

ロッカーの中に彼女愛用の木刀が見えている。視界の端にそれを捉えた秋穂としては何としてでも回避したいところだった。

剣道というものがどんなものなのか、秋穂はそれを知らない。

他のスポーツとは異なり実戦で、つまり真剣な殺し合いでも十分に使える術を秋穂は知らないのだ。

だが、箒の実力までも知らないわけではない。

全国剣道大会優勝。箒の得たその称号は、本人にどんな意志があったとしても他人に誇れるものであり、主張できるものだ。

当然、秋穂も新聞で読み内容は知っていた。

「し、篠ノ之さん。私のこと覚えてる？　小学校の時に会ってるんだけど……」

「小学校？」

「えっと覚えてないかな？　私、篠ノ之さんに道案内してもらったんだ」

「道案内か……」

秋穂の言葉に考え込む箒。その仕草こそ『覚えていない』というサインなのだが、秋穂は希望を持って箒の言葉を待つ。

が、それで思い出せるのであれば最初から忘れてはいないだろう。

「すまない。幼い頃の私は各地を転々としていてな。あまり昔のことはよく覚えていないのだ」

「そっかー。うん、そうだよね。一回会っただけで全部の人を覚えるなんてことは不可能だし。何より私、印象薄いような子供だったしね」

申し訳なさそうにする箒に対しても秋穂は笑顔を絶やさない。うーん、と右側だけの三つ編みを弄りながら。何かを考えるような素振りを見せる。

「そうだ、名前教えてもらってもいい？」

この状況でそんなことをする意味が分らない箒としては、秋穂の返答を待つほかない。のだが、さすがにこの言葉には疑問を持たざるをえない。
今まで自分の名を呼んでいた者が名前を聞いてきたのだから、箒の疑問も当然といえよう。

しかし秋穂の純粋そうな顔に訝しげな顔を向けるわけにもいかず、大人しくしたがっていた。

「篠ノ之だ」
「えっと……しののさん？」

「……篠ノ之だ」
「しののののさん？」

「お前……わざとやっているだろう」
「うぅ……そんな事言わないでよ……」

はぁ、と何かを諦めたような表情の箒は頭に手を当てながら言った。ほとんどの者がそうは呼ばない。

『篠ノ之』の三文字に反応してしまうからだ。それほどまでに大きく絶対な存在だからだ。

「箒でいい」
「えっ……」

「だから、箒でいいと――」

はっとしたような表情で固まる箒。逆に嬉しそうに顔を綻ばせる秋穂。
思い出される記憶ははるか昔のこと。小学四年生、箒が転校してしまう数週間前の出来事だったと箒は理解する。
理解するが……。

「屋上へと続く扉が開かずに泣いていた女の子か。そうかそうか、あの時の」
「そうだよ！！　思い出してくれた？」
「印象的だったからな。まさか二階の教室から帰る途中で屋上にたどり着くものなどそうはいないからな」

箒の言葉に赤面してしまう秋穂。
仕方がなかったとはいえ、自分の過去を他人に語られるのは恥ずかしいものだ。ましてや、それの内容が『学校で迷子になった』となればなおのこと。

「そ、それは。仕方がなかったんだよ！！」
「悪いが私はあんな迷い方をした者はお前以外見てもいないし、聞いたこともない」

ものの数分で笑顔に包まれる更衣室。その間にも着替えを済ませ「またな」と言葉を交わして更衣室を出ていく箒。
その場に一人取り残され、ふぅと一息ついた秋穂はその場に腰を下ろす。

が、再び急いで立ち上がった。
この場来た真の目的を思い出したからだ。箒と仲良くなれて浮かれ

ている場合ではない。

「箒ちゃん、ちょっと待って！！」

入学式からまだ二日。

春日秋穂の周りで安らいでいる者など、誰一人としていなかった。

第三話：擦れ違いと仲直り（後書き）

えっとですね……。
弁解の余地はないことは分かっています。誰のせいでもなく、私の責任であることは明確です。

申し訳ありませんでした。
前回の後書きで私はこう言いました。『戦わせる』と。
戦闘を期待してくださっていた方もいたかもしれません。……いないかもしれませんけど。

今回の内容。まったく戦闘がありませんでした！！
自分でも驚いています。日常パートをすらすらと書いているうちに一話終わっちゃいましてから。

しかも今回、ほとんど何もしていません。これほどまでに展開の動かなかった話を見るのは初めてです。自分の小説ですけど。

次こそは戦います。絶対に戦います。もう嘘はつきません。

と、いうことで。またもやマサムネ先生との会話。

マサムネ「おい」
牡丹「……」
マサムネ「分かってるな？」
牡丹「……はい」
マサムネ「ノクターンは自重しろ」
牡丹「だ、だって百合が――」
マサムネ「黙れ！！」

すみません。本当に自重します。

第四話：受け継がれる刀。抱きつづける想い

セシリア・オルコットの宣戦布告から一週間後の月曜日。一年一組のクラス代表を決める戦いが始まろうとしていた。

一週間。
計算上、一年間の四十八分の一に相当する時間である。
しかしそれを言うのであれば、六十万四千八百秒、とも言える。
もちろん、そんなことを考えることはあまり意味がない。
一週間という時間の定義など千差万別であり、十人十色、人それぞれによって感じ方は全く異なってくる。

そんな中で、事の中心人物である織斑一夏も一週間、幼馴染である篠ノ之箒とともに鍛錬を積んできた。セシリアはイギリスの代表候補生である。知識はあっても専用機のない箒。知識はないが専用機を持つ一夏。

実際に戦うのは一夏一人である。だからこそ一夏は努力した。自分が出来る精一杯のことをしようと思った。
ＩＳを作った束の妹である――というだけが理由ではないが――箒に鍛えてもらった。

剣道を。

「おい、箒」

「何だ、一夏」

二人とも、お互いのことを名前で呼び合うほどにまで関係を取り戻していた。だが、今一番必要なものは『幼馴染との関係』ではなく『ＩＳの基本的な事』である。

「し、仕方がないだろう。お前のＩＳもないのだから」

申し訳なさそうに話す箒だが、一夏としてはたまったものではない。確かに剣道の感覚は少なからず取り戻せた。それだけでも十分だ、と言って感謝しなければいけないのかもしれない。

自分が勝手なことを言っているのは重々承知である。だが。

（……はぁ。大丈夫かな）

自分の専用機がまだ手元に届いていないということを考慮しても、未練がましくそんなことを考える一夏だった。

「織斑くん織斑くん織斑くんっ！！」

第三アリーナ・Ａピット。そこで待機していた一夏達の元に駆け足でやってきたのは一年一組副担任、山田真耶先生だ。

いつ見ても、見ている側がハラハラするような走り方をしているにもかかわらず、今日はいつにもまして急いでいるように見える。それだけ大事なことなのだろう。

と言っても、今、この状況においてその『大事なこと』の中身が分

らぬ者はいないだろう。
クラス代表を決めるための決闘とはいえ、今は授業中である。当然、他のクラスは普通に授業を受けており、実習もある。
ＩＳ学園が一つしかないことがそもそもの原因であることには間違いないが、そんなこともありアリーナを使用できる時間は限られている。

「来ましたっ！！　織斑君の専用ＩＳ」
「織斑、時間がない。さっさと準備しろ」

走ってくる真耶の後ろを急いだ様子もなく歩いてくるのは彼の姉であり、担任でもある織斑千冬だ。
いつもと変わらないその態度に、緊張した一夏の心は少なからず和らぐ。が、悠長に会話している場合ではない。

たとえこの一週間、剣道の鍛錬しかしてなかったのだとしても、既に賽は投げられているのだ。
逃げることなど、周りもそして一夏自身も、絶対に許さないことだった。

ごごんっ、と鈍い音を立てながらピット搬入口が開いていく。斜めに噛み合うタイプの防壁扉は、重い駆動音を響かせながらゆっくりとその向こう側を晒していく。

「……」
「……」
「……」
「……はぁ、馬鹿者が」

ちなみにこの反応、一夏、箒、真耶、千冬の順番である。
そこには確かにあった。一夏の専用機、ＩＳに意識があるということを考えれば、相棒ともいえるのかもしれない。
そう、確かにそこには『白』がいた。
だが、その場にいた者が思わず言葉を失ってしまったのはその『白』の存在のせいではない。
影で身を潜め、扉が開いたことに感激している生徒の存在のせいだ。
「……春日、何をしている」
「あっ、先生！！　えっとですね。一夏君の試合を観るためのみんなと一緒に移動してたはずなんですけど……」
「気が付いたらここにいた、そう言いたいわけか？」
「凄い！！　先生何でも分かるんですね！！　あっ、一夏君。これから試合？　まだ終わってないよね？」
この一週間、箒と仲良くなった秋穂は何かと一夏に近づくようになっていた。
もともと小学校、中学校と同じ学校なのである。秋穂は弾のことしか見ておらず、一夏も秋穂のことは『同じクラスだった』程度の関わりしかない。が、二人が仲良くなるのにそう時間はかからなかった。
尤も、その様子を近くで見ている箒としては気が気でなかったが。
気が合うこともあってか、お互い名前で呼ぶほどの仲の良さにもなっている。

「秋穂……まさかとは思うけど……」
「うん、めちゃくちゃ迷ったんだけど。皆がここにいるって事は何とか辿り着けたんだよね？」

驚く、という感情を持たせない。いつもと同じ秋穂の態度に、その場にいる者は呆れる、というよりも感心してしまう。

これから戦おうとしている一夏ですら、その光景に自然と笑ってしまうほどだ。

「えっ！？　な、何！？　私、何かした！？」

ついてこれていない一人に説明することなく、着々と準備を進めていく。一夏は専用ＩＳ『白式』に身を委ねるようにして乗り、全身の感じを確かめていく。

千冬も普段は絶対に言わないであろう言葉で――具体的に言うと『生徒である弟を教師である姉が名前で呼ぶ』という普通ならば絶対にしない行為だ――確認を取っていた。

ＩＳを装着できたからといって浮かれている時間など一夏には与えられていない。今から実戦へと向かっていくのだ。
一年一組のクラス代表、という重要な役職のためではない。

自分のプライドをかけた戦い。誇りとは命でもある。とすれば、命をかけた戦いだとも言えるだろう。

そんな戦いの相手はイギリスの代表候補生。今現在、一学年では片手で数えるほどしかいない才能の持ち主の一人である。

「行ってくる」

そんな相手を前にしている一夏の表情に諦めはない。
誰がどう見ても明らかである実力の差、経験の違い。それらを確かに感じながら、それでも一夏の表情は変わらない。
しっかりと前――正確には相手が待っているであろうアリーナ――を向き、一呼吸置いて足を踏み出す。

「い、一夏くんっ！！」

そんな彼を止めるのは、姉の千冬ではなく、副担任の真耶でもなく、幼馴染である箒でもない。
春日秋穂、一夏と妙に息の合う少女の言葉で、立ち止まってしまったのだ。

「その、セシリアちゃんも悪気があったわけじゃないの。たぶん、ちょっと拗ねてるって言うか、貴族の生き方が染み付いてるだけだと思うの」

だから、と言葉を続ける。
頭を下げて、この場にいるものとしては最も不適切な言葉を。

「春日！！　お前はどっちの味方なのだ」
「そんな、どっちの味方って言われても。私はただ仲良くしてほしいなって思うだけで……」

箒の苛立ちも尤もだ。この場にいて、一夏の勝利を応援しているのではなくセシリアの応援もしているのだから。だが、織斑一夏、彼も男である。秋穂の言わずとしていることは、あやふやなイメージ

であるものの理解できるものである。

だからこそ、一夏も退かない。

「秋穂、俺は全力で戦う」

「……一夏君」

「言いたいことが分らないわけじゃない。でも、これだけは譲れないんだ」

一夏にそこまで強く言われ、否、言わせた秋穂はそれ以上何も言えなくなってしまう。

自分の言いたいことを分ってくれて、それでも尚行こうと言うのだ。

彼を止める術を、秋穂が持っているはずがなかった。

――戦闘待機状態のＩＳを感知。操縦者セシリア・オルコット。ＩＳネーム『ブルーティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備あり。――。

一夏専用ＩＳ『白式』はその能力を使い情報を一夏に送っていく。

三六〇度、全方位が見えるというのも、もちろん白式のおかげだ。

「せめて……」

最適化処理（フィッティング）の前段階として行なわれる初期化（フォーマット）。膨大な量の情報を処理し、次々とその姿を本来のものへと変えていく。

この調整を経ることで初めて、白式は真に一夏の専用機となるのだ。

「怪我はしないようにしてね」

「……秋穂、ＩＳを装備してるんだから――」
「分ってる。分ってるよ。でもね、それでも私はこう言うしかないの。『頑張れ』なんて事は言わない。だから、怪我しないでね」
秋穂の言葉に軽く微笑むと、一夏は頷いてピット・ゲートへと進んでいく。
その後姿に言葉をかける者はいなかった。後ろを向いた状態でかけられる言葉もなかった。
信頼。そのような言葉を軽々しく使っていいとは思わない。信頼関係を築くというのは、それほどまでに難しいことなのだ。
血が繋がっているから。幼馴染だから。気が合うから。
そんなことで結べるほど軽いものではない。
だが、本人達だけが感じられる『何か』がそこにはある。それは信頼とも言えるし、安心感とも言えるものだ。
一つ言えること、それは信頼関係を築くことは難しいということ。
しかし。
そこに時間の長短は全く関係ない。

「春日、その……さっきは悪かった」
「箒ちゃん？」
「お前に酷いことを言ってしまった。……すまない」

箒の言葉に大袈裟に手を振って反応するが、頑固な彼女がその程度で納得するはずもなく厳しい顔つきで秋穂を見つめていた。
罰を与えてくれと言わんばかりのその顔に、秋穂は苦笑さえすることが出来ない。
「私も悪かったんだよ。だからお互い様。ほらっ！！　一夏君の試合始まっちゃうよ！！」
うやむやにされるのを嫌う箒だったが、この時ばかりは秋穂の気遣いに甘えることにする。目の前のモニターには今まさに戦闘が始まろうとしているところだ。
「……一夏……」
「大丈夫だよ。一夏君は織斑先生の弟なんだもん。セシリアちゃんと仲直りして、ちゃんと帰ってきてくれるよ」
安心感を持って見送ったものの、いざ事が始まろうとすると不安に襲われる。
相手はイギリスの代表候補生。ＩＳの稼働時間を見てもその差は歴然。何がどうひっくり返ったところで、今の一夏には勝ち目などまるでない。
その光景を心配そうに見つめる二つの影。
その後ろで黙ってその光景を見ている二つの影。
第三アリーナに詰めかけた無数の影。
それらの視線と期待、ほんの少しの諦めに包まれたアリーナの真ん中で、二人は堂々と向き合った。

◇　◇　◇　◇　◇

「あら、逃げずに来ましたのね」

ふふんっと鼻を鳴らし、腰に手を当てているのはセシリア・オルコット。

見事な金髪を巻いている貴族のイギリス代表候補生。

「お前こそな」

静かにその姿を見据え、初めての機体に戸惑いながらも答えるのは織斑一夏。

世界最強の姉を持つ世界唯一の男性ＩＳ操縦者。

――警戒、敵ＩＳ操縦者を捕捉。武装の展開を確認――。

セシリアと向き合い、正面でしっかりと話している。が、裏でも同じかと言われればそうではない。

――検索、六七口径特殊レーザーライフルスターライトｍｋ？と一致――。

セシリアは二メートルを超える長大な銃器、スターライトｍｋ？浮いた状態で握っている。直径二〇〇メートル。それだけしかないアリーナ・ステージでは、発射から目標到達までの予測時間はおよそ〇・四秒。試合開始の鐘が既に鳴っている以上、いつ撃ってきてもおかしくはない。

「最後のチャンスをあげますわ」

しかしその銃口はいまだに下を向いたまま。

「今ここで謝るというのであれば許してあげないこともなくってよ」

セシリアは目を細めて笑みを作る。強がりなどではない、圧倒的実力がセシリアにその余裕を与えていた。

だが。

――警戒、敵ＩＳ操縦者の左目が射撃モードに移行。セーフティロックの解除を確認――。

表情とともに送られてくる情報には、その言葉とは真逆の行為が行なわれていることを表している。

武力による提案、それは。

「そんなものはチャンスとは言わないな」

提案でも、交渉でも、譲歩でもない。

――命令だ。

「そう？　残念ですわ。それなら、お別れですわ！！」

――警告！！　敵ＩＳ射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填――。

耳をつんざくような独特の音。それと同時に走った閃光が刹那、一夏の左肩を撃ちぬく。
白式のオートガードにより一夏の体は守られる。が、その衝撃までは殺せるものではない。
左肩の装甲が弾け飛ぶとともに捻じ切られるような痛みがくる。
気絶こそしなかったものの、それさえも白式のブラックアウト防御のおかげである。気持ちの悪い重力を感じてしまう。
「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルーティアーズの奏でる円舞曲（ワルツ）で！！」
言葉と同時、否その瞬間には既に射撃が行なわれていた。
基本的に空中に浮いているＩＳにとって、回避行動とは二次元的なものではない。
前後左右、上下におよぶ回避行為にもかかわらずセシリアの射撃は正確だ。まるで一夏の動きを読んでいるかのように撃ち込まれていく。
しかも。
（無駄な攻撃が一つもない――っ！！　またっ！！）
雨を避けることなど出来はしない。掠るだけならまだしも、直撃することもある。
白式のガードがあるとはいえ、一夏に襲い掛かる衝撃も相当である。

動いているのは一夏だけではない。常に一定の距離を保ち、射撃の雨を降らせてくる。

――バリアー貫通。絶対防御発動。ダメージ２５０。エネルギー残量、１２７。実体ダメージ、レベル高――。

絶対防御――あらゆる攻撃を受け止める代わりに極端にシールドエネルギーを消費してしまうその能力が発動してしまう。
ただでさえ激痛がはしる体に更なる衝撃が容赦なく襲い掛かる。

「中距離射撃型のわたくしに、近接格闘装備で挑もうだなんて。……笑止ですわ！！」

正確無比な射撃。イギリス代表候補生の肩書きは伊達ではない。
片刃のブレード、渡り一・六メートルはある長大な『刀』を装備していたとしても、その全てを受け流し、止められるものではない。

「やってやるさ」

両者の間にある距離はおよそ二十七メートル。セシリアのような中距離射撃型の者にとって最も得意とする距離である。
一方、一夏の武器は刀。近接戦闘専門だ。

たった二十七メートル。ＩＳで全力を出せば何秒もかかる距離ではない。両者ともに動けば、それこそ一瞬という時間で移動できるものだ。

しかし、簡単に距離を縮められるのであれば既に格闘戦が始まっているはずだ。それが出来ない、ということが二人の実力の差をその

まま表していた。

「このフィン状のパーツに直接特殊レーザー(BT)の銃口が開いていますの。この特殊装備こそ、『ブルーティアーズ』であり、この装備を積んでいる実戦投入一号機だからこそ、その名前がつけられているのですわ」

聞いてもいないセシリアの講演。
その中でも射撃が止まることはない。避けながらだが、一夏はしっかりと知識をいれていく。

白式から送られてくる絶え間ない情報と警告アラーム。
それらにも意識を傾けながら、徐々に、だが確実にセシリアとの距離と縮めていく。

円舞曲。テンポの良い淡々とした舞曲、及びそれに合わせて踊るダンス。
なるほど、それは言葉にするに値する、見事な光景である。
セシリアの動きだけではない。弾雨とも言える攻撃を回避する一夏の動きさえも踊りの一部となっている。

「くそっ、このままじゃ……」

何とかできるほど一夏はISに乗っていない。このままでは、何も出来ないまま終わってしまうことは実際に戦っている一夏でなくても分ることだ。

「動きが止まっていましてよ!!」

刹那、後ろから右足を撃ちぬかれる。いくら三六〇度見えているからといっても、それがイコール回避できる、ということに繋がるわけではない。

白式の装甲も万全の状態からは既に遠ざかっている。白式の能力がなければ、気を失っているのは一度や二度ではない。

◇　◇　◇　◇　◇

「……一夏」

ピットで画面越しに映像として観戦している箒の腕に力が入る。組んでいる腕に手が食い込み、変色してしまうほどだ。

「箒ちゃん、大丈夫だよ。大丈夫。だから、ね？」

箒の横で見ている秋穂の方が心配してしまうほどだ。強引に手を握り、体から引き離す。にっこりと微笑む。それだけで、箒の体から力が抜けていくのを感じる。

中を見透かすように、心を洗っていくように。

◇　◇　◇　◇　◇

四機のビットによる多方面からの攻撃。

一夏の反応速度をはるかに超えるその攻撃は、一夏の動きを止めるのに十分すぎる成果を出していた。

（シールドエネルギーは……残り６７、か）

激しい攻撃。

近接格闘装備を手にしている一夏の攻撃はほとんど届いていない。できたことといえば、シールドをわずかに掠った程度。遠距離武器の搭載されていない白式を操縦する一夏にとってこの距離を保つことは非常にまずい。

「いい加減その装備を諦めたらどうですの？　勝ち目のない戦いを続けては意味がなくてよ」

ビットだけではない、なんといってもスターライトｍｋ？。ライフルの攻撃が一番厄介だった。

（これしか装備がないんだよ！！）

ブレードで弾く。弾く。弾く。

弾き、前に進んでいく。

白式の反応を逃がさない。送られてくる警告に耳を傾け、整理されていく情報を正確に処理していく。

「ぐっ！！」

「これで閉幕（フィナーレ）ですわ！！」

ビットは囮。その影に隠れたようにライフルの銃口が一夏を狙う。
セシリアの声が、一夏の耳に飛び込んでくる。

回避できる場所も、時間もない。目に映るのは絶望。
ボロボロの白式に、あの攻撃を受けきれる装甲は残されていない。
受ければ、確実に絶対防御が働くだろう。

しかしその防御が働いて済むほど、白式のシールドエネルギーは残っていない。
シールドエネルギーが底を尽いてしまえば、それが一夏の負けが意味する。

だからこそ。

「はあぁぁ！！」
「なっ！？　……無茶苦茶しますわね。でも！！」

無駄な足掻きだと言いたいかのようにセシリアは指示を送る。と、
それを確認すると同時にビットからの攻撃が襲ってくる。

周囲の空間に待機していたビットによる攻撃は一夏を正確に狙ってくる。

……
正確すぎるほどに

――ここだっ！！

心の叫び。振り向くと同時に一閃。刀をはしらせる。
金属を切り裂く重たい感触とともに、青い稲妻が走る。切り裂いたビットの爆発に気をとられたセシリアの隙を突き、さらにもう一機。

「なんですって！？」

いまだに動揺は隠せない。だが、セシリアの復活は以外にも早かった。右手を振るいビットを操作する。

しかし一夏の動きは先程のものとは違い、いきいきとしている。だけでなく、余裕さえ出てきたためだろうか、表情も少し柔らかくなっている。

攻撃の糸口を見つけ表情の柔らかくなった者と、攻略されかかり顔を引きつらせる者。

二人の間にある差は明らかに縮まっていた。

◇　◇　◇　◇　◇

「……一夏」

一方、一夏が糸口を見つけたところで見ている側の心労までが和らぐわけではない。むしろ逆であり、心配は膨らむばかりである。

「あれ？　ねぇ箒ちゃん。あれって何？」

「あれ？　何のことだ？」

握った手を絶対に離さない秋穂は握っている手と逆の手で指をさす。モニターに映っている一夏は次々とセシリアの動かすビットを切り裂いていく。

『必ず一番遠いところから攻めてくる』ビットのレーザーをくぐりぬけ、懐にもぐりこむ。

その姿に、何もおかしなところはない。

「ほら、あの左手」

「あいつの癖だ。浮かれてあの癖が出た時のあいつは大抵簡単なミスをする」

「へぇ、よく見ていますね。全然気がつきませんでした」

「知らなければ分らないような癖だからな。そういう意味では――」

千冬はモニターから一瞬目を離し、秋穂へ移す。話を聞き終えた秋穂は既にモニターに目を戻し、再び集中して試合を見ている。

何か言いたげな表情の真耶を視線だけで黙らせ、それ以上は何も言わない。

だが、口を開かないだけで千冬の表情が変わっていたことは確かだった。

◇　◇　◇　◇　◇

四機あったビットは既に残り一つ。剣道の鍛錬によって戻り、磨かれた集中力の中で一夏の動きは負傷した者とは思えないほど軽いものだ。

ビットからの攻撃を弾き、ライフルから放たれるレーザーを回避する。ＩＳに乗っている以上死角はない。

しかし操縦しているのは人間なのだ。反応が遅れるところは必ずある。

セシリアの腕前ならばその隙を確実に捉えることが出来た。

だからこそ。

「これで――最後だっ！！」

「くっ」

四機目を振り返りざまに切り裂き、勢いに乗った状態のまま加速していく。

セシリアとの距離はおよそ十五メートル。一・六メートルの刀の事も考えれば、さらにその距離は縮まっていく。

「うおぉぉぉ！！」

しかし、一夏は考えていなかった。

これがイギリスの代表候補生なのか、と。

そのような状況を考えていないのかもしれない。だが、たった四機のビットを破壊された程度で手が出せなくなってしまう、その程度の装備しか積んでいないのか、と。

中距離射撃型を得意とする者が、そう簡単に懐に潜らせるようなことをするのか、と。

国を挙げてのプロジェクト。国家の将来を決めるといっても過言ではないＩＳ開発。

そんなに甘いものではない。
その程度で終わってしまうものであるならば、余裕など出せるはずがない。

「――かかりましたわ」

セシリアの腰部から広がるスカート上のアーマー。その突起が外れ、動く。
上段から振り下ろされようとする刀。一夏の動きは止められない。
しかもこの攻撃は今までのものとは全く違う。動いたものはレーザー射撃を行なうビットではなく――。

「おあいにく様、ブルーティアーズは六機あってよ！！」

――弾道型（ミサイル）である。

まずい、と思う気持ちはある。
動け、と頭では命令を下す。

だが、振り下ろされた刀は止まらない。

頭では分っている。本能が訴えかけてくる。
世界最強なら、あるいは防げたのかもしれない。しかし一夏の実力はそれには程遠い。

それ以前に、そうならないからこその世界最強だ。

◇　◇　◇　◇　◇

「一夏っ！！」

モニター越しでは声は届かない。こんなことは当然分っている。
箒の手に力が入る。秋穂の手を握っていることを忘れてしまうほどの力だ。

しかしそれは秋穂も同じ事。
箒のことなど全く考えず、画面を食らい付くように見入る。

「……一夏君」

心配そうにするのは箒と秋穂だけではない。
真耶も、観客の生徒も、その爆発に目が離せない。

ただ一人。千冬だけが画面を見つめていた。
組んでいる腕も、まっすぐに伸びた姿勢も、厳しい目つきも変わらない。

ただ、わずかに上がった口元だけは隠しようがなかった。

◇　◇　◇　◇　◇

――フォーマットとセッティングが終了しました。確認ボタンを押してください――。

初めてＩＳに乗る一夏には何の事か分からない。ただ、白式の指示に従うように確認ボタンを押す。
膨大な量の情報とともに白式が変化していく。

ボロボロの装甲は光に包まれる。
弾け、傷だらけになった装甲は新しい状態になる。凹凸の激しかった機体自体もシャープなラインで整えられ、どこか中世の騎士を思わせるデザインとなっている。

「そんな……まさか、一次移行（ファースト・シフト）！？」

一次移行。
初期化と最適化が終わり、操縦者に最適な状態へとＩＳが移行することである。

一次移行を完了させることで、初めてＩＳは操縦者の専用機となる。つまり。

「初期設定だけの機体で戦っていたと言うの！？」

――近接特化ブレード・《雪片弐型》――。

刀より反りのある刀身は太刀を思わせる。鎬にある溝には呼応するように光が漏れる。
その機械的な武装は、ＩＳの装備であることを強く意識させる。

何よりもその名前。
雪片。かつて世界最強の座にいた者が扱っていた刀。今尚守ってくれている姉が使っていた刀。

ずっと見てきた背中。ずっと感じていた思い。
その後姿に感じてきたもの。

「俺は、俺の家族を守る！！」

ＩＳの事を隠していた千冬に隠れてずっと見てきた。
雪片を使った戦い方。どう扱えばいいのか、白式が教えてくれるのではなく、一夏は知っていた。

「くっ……」

気後れするものの、そこで終わるようなセシリアではない。すぐさまビットを操り、一夏との距離をとる。
初期設定で戦っていたとしても、一次移行を完了させ真の専用機になったとしても、それがセシリアの負けを意味するのではない。

一夏のシールドエネルギーの残量は既に底をつきかけている。

セシリアの絶対的な優位性は変わらない。

しかし、それは客観的な視点に過ぎない。実際に戦っているのはいくら代表候補生とはいえ若干十五歳の少年少女なのだ。

形勢の逆転による心理的不安を振り払える者などそうはいない。

「おおおっ！！」

素早くビットを一機破壊する。

さらに前に出るとともに、速度を一切落とすことなく続けざまにもう一機。

障害物はもうない。セシリアへの道は一直線。

スターライトｍｋ？による射撃では、一夏の動きを止めることは出来ない。

距離が縮まる。

五……四……三メートルまで迫る。

「これで――」

「まだですわっ！！」

二メートル。

雪片弐型に集まる光から、その力が増していることを感じる。至近距離での射撃を回避し、下段から上段への逆袈裟払いを放つ。

ライフルの次弾装填は間に合わない。そうでなくともこの距離で一夏に銃口を向けることは物理的に無理だった。

（もらった！！）

『試合終了。勝者、セシリア・オルコット』

無情にも、何かが起こる前にブザーが鳴ってしまうのだった。

一夏も、セシリアも、外から見ていた観客さえも、何が起こったのか分らなかった。

◇　◇　◇　◇　◇

「はぁ……」

一夏君とセシリアちゃんの試合を見た帰り。私の足取りは少し重かった。

別に結果に不満があるからじゃない。あの結果はたぶん一番いい結果だと思う。

二人とも全力でぶつかってお互いのことも色々と分ったんじゃないかなーって思うし。

不満はない。でも、最後の『あれ』だけはどうしても気になる。

懐に入るまでは順調だったのに……。

「考えても分かるわけないかー」

気楽に考えて頭を切り替えたいところだ。まぁ、今度一夏君に聞けば教えてくれるだろうし、それまではおあずけって感じかな。

「あれ？　セシリアちゃん？」

前を歩くシルエットに見覚えがあった。

ふんわりとした制服、綺麗な金髪。遠目に見てもセシリアちゃんだと一目で分かる。

「……むら……か」

セシリアちゃんに追いつこうと歩く速度を速める。
後ろから声をかけようとして――。

「……織斑、一夏……」

――それ以上足が進まなかった。
私に気付くことなくセシリアちゃんは進んでいく。
えっと……。今、一夏君の名前を呼んでたよね？
ちょっと頬も赤く染まってる感じだったし……。

「……嘘、ではないよね」

うわー。マジですか。

これは……恋だね！！
箒ちゃんも一夏君のこと想ってるし。一夏君モテモテだね。ここで二人……既にあの人達がいたから。

今の時点で既に四人！？
ＩＳ学園は女の子だらけだからね。これからももっと増えていく気がするなー。

これは早速報告しておかないと。
協力関係を築いている以上、やっぱり情報は大事だよね。

「さて、早く帰らなくちゃ！！　ってあれなんだろ」

案の定、私が寮に着いたのはそこから三十分後のことだった。

第四話：受け継がれる刀。抱きつづける想い（後書き）

四話です。
すみません。これが私の限界でした。

書き終わった後に見直しましたけど……原作とほとんど変わらねぇ！！

本当にすみませんでした。

次回はあの子が出てきます。チャイナ娘です。
ツンデレ、貧乳、幼馴染、とこいつ完全にキャラ食われてんじゃねえの？　といつも思っています。
が、可愛くなるように頑張ります。

いざとなれば語尾に『アル』を……。

第五話：チャイナ娘、参戦

ＩＳ学園。
次世代のＩＳ操縦者を育成するその学校の朝は、意外にも他の一般の学校とさほど変わったところはない。

学食で朝食を取り授業に向かう。
昼食は学食組とお弁当組に別れての昼休み。
昼食後、授業が夕方までありその後は部活動、もしくは自由な時間となっている。

入浴の時間に大浴場を利用する者は少なくない。が、入浴に時間をかけすぎ就寝時間になっても寝ていないのは少々不味い。というのも、寮長がそれぞれの寮を監視しているからだ。

しかも一年生寮の寮長は千冬だ。夜更かしがばれれば説教で済むかどうかも怪しい。もちろん試そうとする者はいない。
入学式の日、『叱ってください！！』と言っていた生徒は何人もいたが実際に叱られるようなことをする生徒はいない。ＩＳ学園に入学した生徒である、程度の違いこそあれ、みんな根は真面目だった。

「一夏さん、お隣よろしいかしら」
「おお、いいぜ」

「待て、セシリア。お前の席は向こう側だ」

朝。いつもと同じように朝食をとる。
同じ部屋で暮らしている一夏と箒は当然ながら二人で食べていた。

が、セシリアの登場により食卓に一人追加される。

「あら、箒さんごきげんよう。わたくしは一夏さんにお聞きしていますのよ？」

「一夏は右利きだ。お前が右側に座ったら食べにくいだろう」

「そうですわね。でしたらわたくしがお手伝いいたしますわ」

一夏を挟んでの言い合い。一夏としてはもう少し仲良く出来ないのかと感じているのだが、現状では二人が仲良くしている光景など想像することさえできない。

「おっはよー！！　一夏君、焼き魚？　私もそれ悩んだんだけどさ、結局煮物にしたんだよねー」

元気よくその喧騒の中に入ってくるのは秋穂だ。

右側だけの三つ編みは朝から面倒臭そうだな、などと思うが口にはしない。

茶色を帯びた黒髪にはオレンジ色のカチューシャが着けられている。

「そもそもお前は――」

「箒さんこそ――」

「……ははっ」

箒とセシリアの二人にも挨拶した秋穂だったが、あまりに白熱した言い合いにかき消されてしまう。

苦笑しながら一夏の向かい側に腰を下ろす。と同時にその箸は一夏の魚へと伸びていく。

「一口だけ貰ってもいい？」
「いいぜ。俺も魚と煮物で迷ったんだよな」
皿を差し出す一夏。見事な焼き加減の魚を口に運び、秋穂の顔が綻ぶ。特に工夫の施された料理ではないが、その『平凡さ』がたまらない。
御返し、と言わんばかりに煮物の皿を一夏に差し出す秋穂だが、違ったのは箸が同時に進んでいったことだ。
「はい、一夏君。あーん」
「ん、サンキュ。……おぉ！！　煮物も美味いな」
「ほんと、学食のおばちゃんは凄いよね」
「秋穂！？」
「秋穂さん！？」
いつもそうしているかのように自然なそのやり取りに、箒とセシリアの反応が一瞬遅れる。
が、既にやり取りは終わった後。
何を言ったところで一夏と秋穂のやり取りがなかったことになるわけではない。時間は巻き戻ることなどなく、ただ前に進むのみなのだ。
「こほんっ。い、一夏。なんだ、その……お前がどうしてもというのであれば、私のおかずをやらないでもないぞ？」
「なっ！？　箒さんあなた――」
「う、うるさいぞセシリア！！　ど、どうするのだ。早く決めろ」
「決めるも何も――」

秋穂に突っかかるのを先に止めたのは箒だった。
自分の皿と箸を持ち、おかずを持って一夏の口へ運ぼうとする。しかし運というのだろうか。
一夏の言うことを適当に聞き流し頷いていたのが悪かった。誰のせいでもなく、完全に箒のせいなのだが。

「――俺と同じ焼き魚じゃないか」

箒の箸が止まる。なぜ一夏と同じメニューを頼んでしまったのかと心の底から後悔し、朝の自分を叩きのめしたくなる気分になる。
だが。

（もらいましたわ！！）

心の声が聞こえていたならば、さぞかし大きな声だっただろう。食堂全体に響いていたと断言できる。
それほどまでに歓喜したセシリアは箒の反対側、一夏の背後から声をかける。

「で、でしたら一夏さん。わたくしの朝食などいかがでしょう」

セシリアはイギリス人である。朝食で一夏や箒、秋穂と同じような和食は食べない。軽めの食事を心がけているし、西洋の料理と焼き魚の相性は試したことがないので美味しいのかどうか分からない。
だが、そんなことは関係ない。今大切なことは一夏に『あーん』をして食べてもらうことであり、あわよくば同じことをしてもらうことだ。

そのためであれば多少おかしな食べ合わせなど気にもならない。
恋する女の子はどこまでも直進し、暴走していくのだ。

「セシリア、気持ちはありがたいけど――」

しかし、恋される側までがそうとは限らない。
ましてや相手は織斑一夏。『唐変木・オブ・唐変木ズ』の異名を持つ男だ。
その行為からくる乙女の心情など理解しているはずもない。どころか、なぜそのような展開に持ち込んでいるのかさえ分かっているのか怪しいほどだ。

だからだろう。
セシリアの提案に対して。

「トーストだけじゃ足りないんなら初めから取っておいた方がいいぞ。なくなることはないだろうけど今でも随分混んでるからな」

その場にいる者を凍りつかせてしまうような台詞が出てきてしまうのだから。

「そ、そうですわね。気をつけますわ。それで一夏さん、よかったら――」
「セシリア、そんなに腹が減っていたのか。そうかそうか。なら私のおかずを分けてやろう。箸がないが、まぁこの程度ならフォークでも食べられるだろう」

「あ、ありがとうございますわ」

セシリアの次の動きを読んだような箒の施し、もとい妨害によって

それ以上何も言えなくなってしまうセシリア。
せっせとおかずを分けている箸の表情はなぜか柔らかく綻んでいる。
その光景は仲の良い友人のように見えなくもないが、たとえ初めての者がこの場にいたとしてもすぐに見えるだろう。
二人の間で激しい火花がぶつかり合っていることに。
「……一夏君、もう一口もらっても――」
「秋穂さん！！」
「いい加減にしろ！！」
ここまではいつもの日常だ。一夏がセシリアとのクラス代表決定戦に負け、セシリアの辞退によって一夏のクラス代表が決定してからの数日間と何ら変わらない。
しかし、今となっては少しその光景に違いが生じていた。
といっても『学食が改修された』などの物理的景色の変化ではない。ほんの二、三日前にＩＳ学園に転校してきた転校生の存在がその正体だ。
「……ふんっ」
「おい、鈴」
一夏の呼び声は聞こえているだろう。自分の不機嫌さをアピールしているようにも見えるその行為は自身に聞かせるのではなく、明らかに一夏に聞えるように言ってきている。
彼女の名前は凰鈴音（ファン・リンイン）。

小学五年生からの一夏の幼馴染であり、それはそのまま秋穂にも同じ関係性が言えるのだが。

『あんた誰？』

その一言でばっさりと切られた秋穂の傷跡はまだ新しい。
昔からその容姿ゆえに男子のみならず女子にも人気のあった鈴にとって、クラスメイトでしかなかった秋穂との記憶は全くない。

その頃はまだ秋穂も一夏や鈴――意識し始めてからも見ていたのはあくまでも弾一人である――を意識していなかったので鈴のことはほとんど知らなかった。

一夏を好きだということ以外は。

「鈴ちゃん。すっごく怒ってたね」
「あぁ、あれは一夏が悪い」

「なっ、何でだよ。俺のせいじゃないだろ。俺は約束をちゃんと覚えて……」

一夏も口で言うよりは悪く思っているらしく、語尾がだんだんと小さくなっていく。

その表情に何か言いたい事があることは明確であったが、秋穂は口を出すことができない。

一夏が話さない以上、無理に聞いてはいけないものだと自分自身に言い聞かせる。友達が困っているのだ。助けたくないはずがない。

相手が知り合いの鈴だというのなら尚更だ。

だが、この問題に秋穂が関係ないのは明らかだ。全く関与していない第三者が間に入ることも一つの手段だとは思うが、一夏がそれを望んでいない。

織斑一夏という男は、極力自分自身の力で解決しようとするのだ。他人に頼るのが嫌だから、ではない。

姉の――織斑千冬の姿を見てきたからだ。

誰よりも助けられているからこそ思う。誰かを助けたい、と。そのせいで余計なことに首を突っ込んでしまうこともあるが、それらを全て合わせてこその一夏である。

だから。

（話してくれるまではじっとしておかなくちゃ、ね）

来るべきその時に動けばいい。今はまだその時期ではないというだけで、必ず助けが必要になる時があるだろう。

「ねぇ、今日のお昼ご飯は何食べる？　私はね――」

そんなことを胸に秘め、秋穂は心からの笑顔で話を切り替えるのだった。

◇　◇　◇　◇　◇

「はぁ……毎度の事ながら意味が分からん……」

ＩＳの基本的な操縦にも慣れた、といえる日が来る事は何時になるのだろうか。そんなことを考えながらグラウンドを整備していく。初めて地面にクレターを作った時と同様にまたしても地面に激突、後片付けを命じられていた。

自分自身の不手際であるため面倒臭いことに変わりはないが不満はない。

元々、一夏がちゃんと出来てさえいればしなくて良かったことである。そのことに不満はないが――。

「こんなんで大丈夫……なわけないか」

思わず愚痴ってしまっている自分がいることに気付き首を振ってマイナスの考えを振り払おうとする。

が、そうすればするほど自身の中に不安が溜まっていくが分かる。

クラス対抗戦。クラス単位での交流、及びクラスの団結のためのイベント、とは言うものの相手はそのクラスを代表してくる者だ。ＩＳの操縦も相当のものだろう。

いくら専用機持ちが少ないとはいえ、ＩＳ学園に入学してくる生徒は既に中学生の時点からＩＳについての指導を受けているのである。ＩＳが使えました。ではＩＳ学園に入学して学んでください。といった風な感じで――半ば強制的に――学んでいる一夏とは根本から違っている。

しかも数日前に発表されたリーグマッチ戦の対戦相手。その相手こそ、一夏がこうも悩んでいる最大の理由だった。

何故なら――。

「鈴が相手だからな……」

凰鈴音、一夏のセカンド幼馴染たる彼女に再会したのはほんの数日前だ。ただ転校してきたわけではなく中国の代表候補生としての肩書きまでついている。

鈴と直接戦ったことはない。が、その強さは既に目の前で証明されていた。

全国剣道大会優勝者の咄嗟に出た本気の一撃を一切焦ることなく防いでしまったのだ。

そんな事、今の自分にできるだろか。いや、考えることなど無駄だ。できるはずがない。

その後でも振る舞いは何事もなかったかのような自然なもの。強者の出せる風格とも言えるものを確かに持っていた。

そんな相手と当たってしまったこと、それ自体も随分と不幸の部類に入るだろうが如何せん間が悪い。

再会したその日に喧嘩してしまったからだ。それも、相手にとって一世一代とも言える約束を間違って覚える、というなんとも間抜けなことが原因だった。

その日から悪化した関係はいまだに修復できていない。

一夏の方としてはこれであっていると思っているのだ。発言の解釈が間違っているなどとは微塵も思っていない。

一方、鈴としては堪ったものではない。
一夏の唐変木ぶりを知らなかったわけではない。むしろ幼馴染として小学五年生から中学二年生までの間をともに過ごしていたのだ、一番良く知っているという自信さえある。
だが、それでも意味ぐらいは分かるだろう。あろうことか間違えて覚えているなど許せるものではない。

が、その発言をもう一度言うことも、発言の本当の意味を伝えることも、鈴にはできるものではない。そんな自分を歯がゆく感じるものの、最終的には『一夏が悪い』というところで落ち着いている。

「はぁ……」

一仕事終えた後の、本来ならば休まる時間でさえも今の一夏には重たいものでしかない。
自分にＩＳが操縦できる原因も分かっていない。これからどうなっていくのかも分からない。鈴との戦いもどうすればいいのか分からない。

分からない事だらけで悩みが尽きることはない。

（でも……）

考えたところで分からないものは分からない。分かる時がくれば、その時はおのずと答えも見つかるだろう。
ならば今考えることはそんなことではない。『今を』どう過ごしていくかだ。

一夏にできることなどあまり、というかほとんどない。クラス対抗

戦でも白式には≪雪片弐型≫しか装備が搭載されていない以上、それを使って戦うしかない。
選択肢が決められている分、むしろやることが明確になっていて簡単なぐらいだ。

「よしっ！！」

何の根拠もないが、自分に喝をいれてやる気を出す一夏だった。

◇　◇　◇　◇　◇

その頃、授業を終えた秋穂はある所へと向かっていた。
ぎすぎすした最近の雰囲気に耐えられなくなってしまったのが原因である。

一度来たことがあるからか、彼女の普段からは到底考えられない歩みの速度と正確さだ。しかしそれはそれだけ彼女が必死だということだろう。

「終わりが近いって言ってもまだ活動中だもんね」

『剣道部』その看板がかかったすぐ隣で一人、誰にも聞こえないように呟いた秋穂は壁に体をあずけるように寄りかかり、空を見上げる。

夕方に近づいている空はオレンジに染まり、今日の秋穂のカチューシャとお揃いになっていく。と、そんな空を見ながら。

（駄目だよね……）

確信にも似た想いを胸の中だけで抑える。言葉にしてしまってはそれが本当になってしまう気がした。

待つ。そう決めたはずなのに、納得できない自分がいることに気づいてしまった。否、最初から納得などしていない。

一夏が何も話さないから。それで片づけてしまうのは簡単だ。実際秋穂は何の関係もない人間であり、これは一夏と鈴の問題だ。自分が首を突っ込む必要などなくそんなことはただの迷惑でしかない。

「ありがとうございました」

そんなことは分かっている。

だが、頭でさえも納得してはくれなかった。友達が困っているのならば手助けするのは当然だ。何を躊躇う必要がある。そう言ってくるし、よく考えた今でも両方の思いがぐちゃぐちゃに混ざっている。

「お疲れ様でしたー」

どうするべきか……。そんな風に考えていたら、急に考えることが面倒臭くなったのだ。

考えたところで分からない。分からないなら、とりあえず動こう。

そう思いまずはこちらに来た。

一夏の居場所を考えれば、セシリアのところに行った方が早かった

かもしれない。そう考えた秋穂だったが――。

（箒ちゃん、何か知ってそうだったもんね）

わざわざ剣道部にまで来たのはそのためだ。事情を聴くことができれば力にもなりやすい。

「あら、あなた入部希望者？」

次々と部室を後にする生徒を見送りながら待っていた秋穂に最後の生徒から声がかけられる。急にこちらに来たため何事かと思っていたが、どうやら勘違いされたらしい。

尤も、じっと剣道部の部室を見ているのだから当たり前だ。

「い、いえ。私、箒ちゃ――篠ノ之さんに用事があったんですけど、今日は来てないんですか？」

「篠ノ之さんのお友達？　ならそろそろ『部活に戻ってきてほしいな』って言っておいてくれない？」

「そろそろ……ですか？」

言い方からしてこの女性が部長であることはなんとなく想像できる秋穂だったが、どうにもその言い方には疑問が残る。

まるで――。

「篠ノ之さんここのところ全然来てないのよ。まぁ忙しいのも分かるけど。彼女が来てくれるともっと活気づくと思うから。それじゃ、よろしくね」

「は、はぁ……」

秋穂の考えを先に言葉にしてしまった部長はそのまま秋穂から離れ

て行ってしまう。

「箒ちゃん、どこにいるんだろ」

秋穂が抱いた疑問は、至極当然のものだった。

◇　◇　◇　◇　◇

季節が春、ということもあって夕方の時間は冬よりも長い。そんな中を私は走っていた。

箒ちゃんに会いに剣道部まで行ってみたけど、どうやら箒ちゃんは最近部活に行っていないらしい。

真面目そうな箒ちゃんからは考えられないような事だけど、ちょっと考えれば分かるよね。

なんて言ってもセシリアちゃんが一夏君のコーチをしてるんだから。二人っきりの状況なんて箒ちゃん、絶対に許さないだろうし。って言っても寮に帰れば箒ちゃんは一夏君と朝まで一緒なんだからちょっと不公平かなー、なんてことを思ったりもする。

私は二人とも頑張ってほしいと思うし、仲良くしてるんだから立場上は蘭ちゃんを応援しないといけないのかもしれないけど……。

うん、蘭ちゃんは私がみんなと仲良くなりたい事は分かってるよね。

はぁ、それにしても。

「遠いなぁ」

思わず声に出てしまう。出したところで距離が縮まるわけじゃないし、私の足が速くなるわけじゃないけど。

っと、言ってる間に更衣室が見えてきた。特訓をしている以上、アリーナを使ってるのは当然だし、ここまで来たら一夏君に直接聞いても変わりないと思う。

そこで断られちゃったら、明るくすることだけを考えよう。

私にできることは限られてるけど、その範囲内でなら頑張ってみてもいいよね。

「失礼しまーす」

「うっさい馬鹿！！」

「馬鹿って言った方が馬鹿なんだよ！！」

えっ！？

何でこんなことになってるの？

一夏君がいて、鈴ちゃんがいて、箒ちゃんにセシリアちゃんまで、っていうか関係ありそうな人が全員この場にいるってどういうこと？

それに一夏君と鈴ちゃんは激しく言い合っているみたいだけど、傍で見ている二人は何て言うか参加していないように見える。

二人が言い合っている状況にどうしていいか分からないからそのままにしてるってとこかな。

ってそんなことをのんびり考えている場合じゃないよ。早く二人の言い合いを止めないと大変なことに。

「なによ、唐変木！！」
「うるさいっ、貧乳」

す、凄いね……。場の空気ってここまで固まってしまうことがあるんだね。
そう、感心してしまうほど誰もが動けなかった。動けなかったわけじゃないけど、動いちゃいけない気がした。
そしてその勘は見事に当たることになる。

「あ、アンタ……言ったわね。言っちゃいけないことを、言ったわね……」

あっ、鈴ちゃんの拳が壁に突き刺さってる。ＩＳが展開されてるから当たり前だけど、これって不味いんじゃないかな。こんなところを織斑先生に見つかったら……じゃなくて一夏君の命が危ないよね！！

「ま、待て鈴！！　今のは俺が悪かった！！」
「今の『は』？」

鈴ちゃんが一夏君の正面に向き直る。鈴ちゃんのＩＳで殴られたら……ぺしゃんこ、なんて可愛い言い方は出来ないよね。っていうか原形を残してくれるかさえ怪しい。

「今の『も』でしょ！！　アンタが悪くなかった時なんて一つもないわよ！！」

罵声だけ残して鈴ちゃんは更衣室を出て行く。ＩＳの解除して、ただの凰鈴音として。

「……」

あまりの出来事にみんな呆然としてしまった。もちろん私も。
でも、その場に来たのが一番最後でその場の流れを知らなかったことが幸いしたのか、一番初めに駆け出したのも私だった。

「一夏君！！　小さくたって胸は胸なんだからね！！　箒ちゃんやセシリアちゃんみたいな大きい方が好みなのかもしれないけど、女の子の価値は胸だけじゃないんだから！！　一夏君だってその……大きい小さい言われたくないでしょ！！」

ちゃんと一夏君への説教も忘れずに。

鈴ちゃんが走り出してすぐだったのが良かった。すぐに鈴ちゃんの背中を見つける。

見つけはしたんだけど……。

「はぁ……はぁ……」

鈴ちゃん、どこまで走るの！？
私、体力には自信がある方だったのに、鈴ちゃんに、全然追い付けない。

さ、流石代表候補生だね。全てが一流だよ……。

もうここがどこなのか分からない。すぐに鈴ちゃんに追い付くと思ってたし、何より周りを確認してたら見失っちゃいそう。

もう、限界近いんだけど……。鈴、ちゃん。

「あっ――」

自分の足に引っかけてしまった。私の馬鹿！！　何でこんな時に！！　そう思っても、体は止まってくれない。

「鈴ちゃん、待って！！」

「――っ！？」

精一杯の声で叫ぶ。今ここで見失ったら、駄目だと思ったから。私って声が大きいのかな？　鈴ちゃんが反応してくれたことが分かった。

分かったけど、そこまでだ。もつれた足は前に進むエネルギーを殺してはくれない。

慣性の法則って言うんだよね。ちょっと賢い子ぶってみたり。

ゆっくり感じる時間は、それでもやっぱり永遠じゃない。終わりは以外にあっさりくる。

「痛っ！！」

派手に転ぶ。箒ちゃんとの再会の時もそうだったけど、もしかして私って転びやすい子なのかな。
足元が不安定って言うよりは慌てやすいのかもしれない。

「何してんのよ……。ほら、怪我はないの？」

冷静な私の診断結果が出るよりも先に上から声がかかった。
見上げた先には呆れたような、でもちょっと安心した様子でトレードマークのツインテールを揺らす鈴ちゃん。

「鈴……ちゃん？」
「追ってる相手に助けを求めるってありなの？　まぁ私がこうしてるから有りなんだろうけど……」

見上げた私から視線を逸らすように横を向く。でもその手は私に伸びていて、言ってることが本音じゃないことを私に知らせてくれた。
不幸中の幸い、って言っても怪我をしなかったって言うだけでめちゃくちゃ痛いんだけど……。とりあえず、私の事は置いておこう。

「ありがとう」
「あんな目で見られたら見捨てるなんて出来ないじゃない。それに……友達だし……」
「えっ？」
「な、何でもないわよ！！　それより、何しに来たのよ」
最後の方が聞こえなかったんだけど……仕方ないよね。鈴ちゃんが

何でもないって言うならそれを信じておこう。

「えっと……」

「何よ、はっきり言いなさいよね」

言っていいのかな。

でも……ううん、私はそのために動こうと思ったんだから。

だから思ったように話さなきゃ。

「一夏君じゃなくてごめんね」

鈴ちゃんの息が詰まったのが分かる。たぶん当たりだから。

あんだけ言っても、やっぱり好きな人に追いかけてきてほしかったよね。

あれだけの迫力を見せられた直後に追いかけてくれる男の子がいるかどうかだけど、その辺り、一夏君は大丈夫かな。

今回は失敗しちゃったけど。

「い、一夏!? 何で一夏の名前が出てくんのよ!! 関係ないでしょ!!」

「えっ? だって――」

焦ってるのが分かる。だから、そこに言葉を重ねていく。

「――好きなんでしょ? 一夏君の事」

「はぁ!? ア、アンタ何言ってんのよ。好き? 私が? 一夏を

？　な、何言ってんだか。そんなわけ――」
「私は好きだよ。一夏君の事」
もちろん、『友達として』だけどね。今はそれを言う必要はないかな。
鈴ちゃんにも元気になってもらいたいわけだし、やりすぎは危険だけどこれくらいなら大丈夫。
「なっ……アンタ……何を……」
「パクパクさせてどうしたの？　ほらほら、鈴ちゃんも言っちゃいなよ。好きな人誰なのー？」
「い、いないわよそんなやつ！！」
スタスタと私の前を歩いていく鈴ちゃん。うぅー。強がってる鈴ちゃん、可愛い！！
「ねぇ、鈴ちゃん！！」
「ちょっ！？　い、いきなりなんなのよ！！　ってか後ろから抱きつくな！！」
「ねぇねぇ……好きなんでしょ？　一夏君の事」
「だぁぁぁ！！　耳元で話さないで！！」
「教えてくれてもいいじゃん。ねぇ、鈴ちゃん」
「ちゃんちゃんうっさいのよ！！　あと離れなさいよ、歩きにくい！！」
「鈴ちゃんが言うまで離さないよー。なんなら、話すまでこちょこちょしてもいいんだよ？　鈴ちゃんの肌はスベスベだからなぁ。うっかり滑ってどこ触っちゃうか分からないなー」

「な、何でっていうかいつ服の中に手を入れたのよ！？　服の上からでも出来るでしょ！？　ってちょっと聞いてるの！？　止めなさ……そ、そこはダメー！！」

ちょっとだけ心の距離が縮まったかなー、なんて事を考えている私はやっぱりまだまだ駄目なんだと思う。

こうして鈴ちゃんが表面上だけでも明るくなってくれたのは嬉しいけど、それでも一番嬉しいのは私だから。

もやもやした気持ちが晴れていくようで、雲の切れ目から太陽が見えてきたみたい。

言い合いの最中にそんなことを考えながら、私たちは寮へと帰っていった。

背けた頬が少し赤く染まっていたのは夕日に当てられたから、って思ってあげて言わなかったのは内緒だ。

言ったら絶対怒るもん。

さて私の役割はこれで終わりかなー。

あとはヒーローに何とかしてもらわなくちゃ。

信用してもいいよね？　何て言ってもあのセシリアちゃんを落としちゃったんだから。

だから、期待して待ってよう。

「……アンタ……ただじゃおかないからね……」

うん。やっぱり女の子は笑顔が一番！！

第五話：チャイナ娘、参戦（後書き）

第五話です。
何ででしょうか。秋穂を一人歩きさせると、どうにも百合要素が入ってしまいます。
誰かの陰謀でしょうか。天然ちゃんは恐ろしいですね。
さて、この小説も早いもので五話です。こう余計なことをしていると無性に書きたくなってきます。

千冬姉を！！

ということで次回は番外編になるかもしれません。
いや、まぁ普通に本編進むかもしれませんが……。
ＰＶ１０，０００越え、という私的には大事件の記念でもありますし……。
もっと後になるかもしれませんけど。ヒロイン全員集合してからとか。
気長に待っていただけると幸いです。

第六話：一番怖いものは

クラス対抗戦。
アリーナの中央で睨みあっている二人の姿があった。
ＩＳを起動させている一夏と鈴だ。中に浮いている二人は睨み合い、言葉を交わす。

しかしその言葉は二人にしか理解できないものであり、またそれを他の者に理解させる努力など一切していない。

どちらが悪い、というものではない。
勘違いをしている一夏が悪いのかもしれない。
説明をしない鈴が悪いのかもしれない。

だが。

「……ほんと、鈴ちゃんも一夏君も不器用だよね」
「春日さん、どうかした？」
「ううん、何でもないよ。ただ……」

「え？　ただ、何？」

秋穂の顔に不安はない。

「ちょっと楽しみかなって」

秋穂の顔には笑みがあった。友人である二人が戦うのだ。苦しい思いをするかもしれない。

そう思っていたが、今はもう違う。

二人の間にある空気がむしろ羨ましくもある。

全力で相手にぶつかっていく。

『みんなと仲良くしたい』。意地の悪い言い方をする者がいれば、それは八方美人だと言うかもしれない。

だが、そうでない、と秋穂は否定しない。

裏表のないその性格は良くも悪くも相手を受け入れようとする。尤も、事には限度というものがあるが……。

ともあれそんな彼女には、この光景は羨ましいものだった。

鈴が一夏に恋をしている。というのも一つだろう。

理由はどうあれ『好きな人と全力でぶつかる』という、未だ秋穂のしたことのない行為を簡単にやってのける二人が――羨ましかったのだ。

（いいなぁー。私も弾さ……っといけない。しっかり見てなくちゃ）

集中して試合を見る。前回は迷ったためにピットでの観戦だったが、今回は違う。箒とセシリアは『人混みはいい』と言って観客席には来なかった。

だから、というわけではないが、話を止め余計なことを頭の中から消していく。

試合開始のブザーが鳴り響く。

◇　◇　◇　◇　◇

「織斑くん、調子は良さそうでしたか？」
「あぁ。……山田先生。その顔はなんだ？」

「いえ。あまり言葉も交わしていないのに、やっぱり分かるもんなんですね。織斑先生、流石ですね。織斑くんの姉……痛い！！　痛いです！！　お、織斑先生！？」

口は災いの元。真耶の言葉と表情は千冬を刺激するのに十分すぎるものだった。

「前にも言ったはずだ。私はからかわれるのが嫌いだと」

「そ、それは知ってます！！　でもこれはからかったわけではなく――」
「ほう、言い訳をするか。なら、こちらにも考えがある」

千冬の無表情は変わらないが、真耶の頭を絞めている腕の力は徐々に、などという表現の方が嬉しく感じるほど一気に上がっていく。

眼鏡の向こうで涙目になっている真耶の顔は残念ながら千冬からは見えない。と言うよりそもそも見ていない。

千冬の視線の先は一夏と鈴の試合に固定されている。

腕は解除されていない。

「すみませんでした！！　私が悪かったです！！　からかってました！！」

「罪を認めたか。……だが、許しはしない」

「お、織斑……先生……」

周りに生徒がいる状態でも、ぶれることのない教師陣だった。

◇　◇　◇　◇　◇

「ぐっ――」

アリーナでの一夏と鈴の試合は前回のセシリア戦と同様、否、それ以上の激しさになっていた。

鈴の専用機『甲龍（シェンロン）』。

砲身も砲弾も見えない衝撃砲《龍咆》は直線にしか撃てないものの、確実に一夏を追い詰めていた。

というのも。

――空間の圧縮を確認――。

「甘いわっ！！」

「ぐあっ！！」

ＩＳの処理能力は優秀だ。大気の流れ、空間の歪みなどであっても数値を出し、操縦者はそれを知ることができる。

ハイパーセンサーでは数百メートルの位置にあるものであろうとはっきりと見ることができる。

速度も人間のそれを遥かに上回り、ＩＳ以外でＩＳに勝てるものはない。

しかし。

例えば『打鉄』というＩＳがある。

日本が量産している防御重視型のＩＳだ。専用機を持っていないほとんどの生徒はそれを操縦し、実力をつけていく。

そこで試合をすれば当然ながら勝者と敗者がいる。

ほとんど同じ、というだけで確かにここによって多少の違いはあるだろう。だが、その機体の差など微々たるものだ。

ではなぜ同じ機体を使っているのに勝敗がつくのか。

簡単だ。

「まだ――終わりじゃないわよ！！」

操縦者の実力の差である。

いくらＩＳが宇宙での活動を前提に作られたために丈夫で、処理能力に優れ、世界最強の兵器だったとしても。

『操縦者がいなければＩＳは動かない』
入学したばかりの一夏でも知っていることだ。
それゆえに、操縦者の実力によってＩＳはそのパフォーマンスを何倍にも引き上げることができる。

（くそっ……）

一夏は心の中で悪態をつく。
見ることのできない《龍咆》を躱すためにＩＳのハイパーセンスを使用している。が、それでは遅すぎる。
空間が圧縮され、大気の流れが乱れる。それをＩＳが感知した時には既に放たれた後であり、撃たれてから分かっているのに等しかった。
だが、それで終わりではない。それで終わりであるならば、まだ戦いようはいくらでもある。
しかし《龍咆》はあくまでも牽制でしかなかった。本命は大きすぎる青龍刀と拳なのだ。
パワータイプ。
その一言で終わらせてしまうにはあまりにも強大で、圧倒的な力だった。
零落白夜。

全ＩＳ中でもトップクラスの攻撃力。シールドエネルギー無効化攻撃を持っている一夏だが、その攻撃も当たらなければ意味がない。

失っていた剣道の感覚は戻りつつある。明らかにセシリア戦よりも一夏は強くなっている。

それは事実ではある。

しかし、その刃が鈴に届くかどうかというのはまた別の問題だ。

いくら感覚が戻ろうと、届かないものは届かない。

武器の性能ではなく、操縦者の実力がものを言う。

（気持ちで負けない……か）

《雪片弐型》を構え直す。鈴が強いことは分かっていた。自分の刃が届かないことは今に始まったことではない。

セシリアの時もそうだった。

それでもあそこまでやれた。結果として負けてしまったが、得たものは確かにあった。

「鈴。本気でいくからな」

「な、なによ……そんなこと、当たり前じゃない……。とっ、とにかくっ、格の違いってのを見せてあげるわよ！！」

距離を考え、タイミングを見定める。

奇襲は一度しか効かないからこその奇襲だ。その一撃を何としてでも届かせる必要がある。

白式のスペックは他のＩＳと比べても決して低いものではない。ど

ころか、高い部分は数多くある。
生かすも殺すも一夏次第だ。

「うおぉぉぉ！！」
「一夏君、上！！」

ＩＳのハイパーセンサーのおかげだろうか。知った声が届いた気がした。その声に反応しようとして、一夏の動きが止まってしまう。見るよりも先に、ＩＳの感知よりも先に、その声が届いたことによって未来は大きく変わる。

その直後、アリーナ全体を爆発音が包んだ。

◇　◇　◇　◇　◇

爆発音の直後、遮断シールドを貫通した『それ』のせいでアリーナ全体に凄い衝撃が走った。

避難することもできない生徒に混じって、私もその場で足止めを受けていた。

「春日さん、大丈夫？　顔色が悪いけど……。どこか打った？」
「私は大丈夫だよ。私は……」

戦っている一夏君と鈴ちゃんを前に私は何も出来ずただ見ているだけ。
私は専用機を持っていない。ＩＳを持っていないのだから当然だ。

私の中でそうやって言い聞かせている私がいる。

『行って何になる？』
『専用機も持っていないのに』
『戦いの邪魔になるだけだよ』
『邪魔にならないことで、役に立ってるんだよ』
『もうすぐ先生達が助けてくれる』
『怖い』
『なら、他の人に任せよう』
『何とかしてくれる』
『だから』
『逃げることは当たり前なんだ』

『零落白夜』について聞いたのはほんの少し前。出来ることがなかったから、私に出来たことは稽古の後の差し入れぐらいだった。

だから、一夏君がどれくらい強いのか。それを私は見た感じでしか知らない。
それでも分かる事はある。

例えば。

『この相手はおかしい』ということ。
灰色の機体でも、長い手足でも、初めて見る全身装甲（フル・スキン）でもない。

何が、って聞かれて答えられるものじゃないけど。でも、普通じゃないって思う。

ＩＳ学園に攻撃を仕掛けてる時点で十分普通じゃないんだけど……。
「聞いた？　今どこかからハッキング受けてシステムが動かないんだって」
「じゃあ先生達が出てこないのもそのせいなの？　ここも危ないんじゃ……」
「なんでも三年生の先輩が頑張ってくれてるって聞いたけど」
「あのＩＳ、どこの国のなの？　ここを攻撃する意味が分からないんだけど」
「自分の立場を悪くするだけよね」
周りの声が私の耳に入ってくる。
それがどんなに聞きたくない言葉でも、これだけ密集してたら嫌でも入ってくる。
でも、今に限っては『嫌だ』なんて言ってられなかった。
「……一夏君、鈴ちゃん……」
ハッチが開かない事には先生達は出れない。
こうしている間にも、一夏君達は戦ってるのに……。
「だ、大丈夫よ。織斑先生だっているんだし……」
周りからも不安を帯びた声が届いてくる。当たり前だ。私たちは戦い方を学んではいるけど、実際に戦うことなんてほとんどない。
ＩＳはすごく危険な兵器だけど。

その気になれば世界を滅ぼせるんだろうけど。

そんなこと私たちは、私は、考えたことなんてないから。

『敵対心』を向けられることはあっても、『殺意』を向けられることなんてないから。

「織斑君がっ！！」

ボーッとしていた顔をアリーナに戻す。

鈴ちゃんと二人で戦っている一夏君だけど、その表情はやっぱり苦しそう。

二人とも頑張ってる。けど、頑張っても頑張っても、報われない時はある。一夏君が頑張っていた事を私は知ってる。だから余計にそう思う。

でも、それでも……。

「――っ！？」

足が震える。思っただけで、考えただけで、実行に移す前からこんな状況で、役に立つはずがない。

だって私は専用機を持ってない。一夏君を助けることなんて、出来ない。

今行ったら一夏君は私を守ろうとしちゃう。皆を守ってるのにその上で、だ。

そんなこと普通な考えたら無茶だ。どうしてこっちに攻撃してこな

いのかは分からないけど、こっちに意識が向いていないのは有り難かった。

私にできることなんてないし、邪魔になるくらいならいっそここで――。

「一夏！！」

アリーナ全体に響く声。その声は強く、呼ばれているのは私じゃないのに激しく心を揺さぶってくる。

だってその声は――。

「男なら――」

その声は、『専用機を持ってない』箒ちゃんの声だったから。

きっと何かをしたいんだ。そう思う。

たぶん、セシリアちゃんも動いてる。二人を助けるために。

一緒に戦うために。

「っ……」

怖い。

最初の一歩が出ない。

『私にできることなんてない』

『邪魔なだけだ』
『怪我をする』
『痛いのは嫌だ』
『ここにいれば安全だ』
『あの人達に任せればいい』
『もうすぐ助けが来る』
『わざわざ危険に首を突っ込む必要はない』

色々な言葉が私の足を鎖で繋ぐ。重りになって絡み付く。
私がこうしている間にも、一夏君達は戦っている。
皆を守るために。
先生からの命令も無視して。

「――っ！！」

歯を食い縛る。

「……を……いて」
「ど、どうしたの、春日さん！？」

「私を思いっきり叩いて」

情けない。他の人に頼まなきゃ動けないなんて、本当に情けない。
戦ってるのは友達なのに。助けにいくのに、他人の後押しがいるなんて。

でも……。

「本当にどうしたの？　やっぱりどこか――」
「ごめんね。時間がないの。……思いっきりお願い」

「……いいの？」
「うん。ごめんね、こんな事お願いして」
――パァン！！
乾いた音は騒然とした観客席にはよく響いた。周りがざわついているのが分かる。こんな状況で喧嘩を始めたのかと思われたかもしれない。
同じクラスってだけでこんな事を頼んじゃうなんて……。もしあの子が非難されたら私のせいだ。
でも、今はごめんね。謝るよりも先にしないといけないことがある。
だから。
「ありがとう」
「えっ！？　ちょっと、春日さん！？　どこにいくの！！」
笑顔を最後に見せちゃったのは、なんだか今から死にに行くみたいな感じになっちゃったな。なんて、何考えてるんだろう。
今からは遊びじゃない。下手をすればそれこそ私の命なんてすぐに消えちゃう世界だ。
何も出来ない、なんて考えない。
何か出来ることはあるはずだし、なければ作ればいいんだ。
足の震えは止まっていない。さっきよりはましになったけど、それでも心は恐怖でいっぱいだ。

血が出た。なんて言って泣くことは許されないし、弱音の一つも言っちゃ駄目だ。

でも。それでも。私は行く。足を前に動かす。

気付いたから……ううん、本当はずっと分かってたはずの事。

何が一番怖いのか。

「一夏君、左！！　まだ終わってない！！」

叫んだ直後、一夏君が衝撃砲の光に包まれる。

飛び込んでいったその背中はとっても格好良くて。

力になれたかどうかなんて分からないけど、それでも一緒に戦いたいって思った。

私にとっての恐怖が分かったから。

◇　◇　◇　◇　◇

窓から入る夕日が部屋を赤く染めている。

保健室のベッドに横たわっているのは一夏だ。カーテンで仕切られているためにその強い光は直接は入ってこない。

が、カーテン越しに見える赤さは夕日の輝きを物語っていた。

「……」

規則的に上下する胸と呼吸を聞いている限り、一夏が起きそうな気配はせず、寝返りさえうちそうにない。

「……ふぅ、落ち着かないと……」

見下ろしているのはツインテールを揺らす少女。一夏の寝顔を見つめ、何度も深呼吸を繰り返して高揚する気分を落ち着ける。

「……大丈夫よね？」

カーテンから顔を出しキョロキョロと辺りを確認。誰もいないことに安堵しつつ、胸に手を当てて呼吸を整える。

再び深呼吸をするが時間もないことに気付き行動を開始する。

（……よしっ！！）

心を決めてベッドに近づいていく。彼女の身長が低いこともありベッドに片足を乗せて顔を近づけていく。

「んっ……」

「――っ！？」

垂れ下がった髪が一夏の顔にかかる。擦れてむず痒さを感じたのか、一夏の口から声が漏れる。が、余程熟睡しているのか、一向に起きる気配はない。

その一挙に激しく動揺し、思わずベッドから離れる。

両手を口に当て、叫びそうになる心を必死に落ち着ける。時間にして数十秒。たったそれだけの時間だが、少女には無限の時間にも思える。

「……よしっ……」

再び行動を起こす。鍛えられた動きで素早く近付き、一夏の顔を覗き込む。

大した障害にならなかったのか、一夏の寝息はその規則性を一切乱していない。

同じ過ちを犯さないために自身の髪の毛に気を付けながら顔を近づけていく。

目に入るのは唇だ。それを許すと言う行為が何を意味するのか、それが分からない少女ではない。

『お前の背は俺が守る』

激しい戦いで傷付きもした。だが、その言葉は何よりも嬉しく、恥ずかしさはあったものの少女には力を与えてくれたのは確かだ。

目を閉じる。

空気からすぐそばまで近付いていることが分かる。

迷っていては止めてしまいそうになる。何も考えず、一気にその距離を詰めようとして。

その横顔に明るい光が当たっていることに気がついた。

「じー。あっ、いいよっ！！　続けて続けて。夕日をバックに唇を合わせる男女。寝ている少年の唇を奪う美少女……」

「なっ……なんで……どこから……」

「シチュエーションは何でもいいんだけど。すっごい絵になってたから」

パクパクしている少女――鈴に向けて笑顔で話す秋穂。

しかしその笑顔は鈴の行為に対する牽制の笑顔ではなく、どこか悲しみを匂わせるような苦笑いだった。

「鈴ちゃん」

「な、なによ……」

身構える鈴に向けての秋穂の言葉は、しかし彼女の想像とは全く違うものだった。

「ごめんね」

「……えっ？」

「それだけが言いたかったんだ。邪魔しちゃったね。じゃあ続きをどうぞ！！」

「ちょっと、待ちなさいよ！！」

「また明日ねー」

鈴の言葉を聞いているだろうが、秋穂は止まることなかった。保健室の扉を静かに開け、素早くその場を後にする。

その一連の流れに何も言えず、それ以上追いかけることも出来ず、ただ呆然と立ち尽くす。

「一体なんなのよ……」

「んっ……鈴？」

保健室から騒ぎ声が聞こえたのは、それからしばらくしての事だった。

◇　◇　◇　◇　◇

春の夜は涼しい、とは言いがたい気温だ。

冬から季節は移っているとはいえ、その風はまだ冷たく少女の肌を突き刺していく。

風に吹かれ、屋上から外を見ているのは秋穂だった。

右側だけの三つ編みを手で絡ませ、口から出るのは言葉ではなく溜め息だった。

――ガチャ。

後ろから聞こえてくる音に振り返ることはしない。

こんな時間にこの場所に来る者など、この学園においては限られている。

「……強さって何ですか？」

「……」

後ろから言葉は返ってこない。だが、答えてもらうことを求めていないのか、秋穂の言葉は止まらない。
ただ話しているように。自分に言っているかのように。

「今日、すごく怖かったんです。『敵』なんて今まで会ったことありませんでしたし、ああいうのを目の当たりにする事も初めてだったから……」

「……」
「私、逃げようとしたんです。戦ってる友達がいるのに。守ろうとしてくれている友達がいるのに。私……」

「……春日」
「情けないですよね。隣の人に叩いてもらわないと足が動かなかったんです。動いてからも、震えっぱなしだったんです。だから――」

振り返り、秋穂は問う。風に髪を靡かせ、乱れる髪を押さえることもせずに。

「教えてください。織斑先生」
「自分で考えろ。分からないなら悩めばいい。悩んで、それでも分からないなら、そこがお前の限界だ」

いつものように、否、いつも以上に厳しい千冬の言葉に安心している自分がいることに気づく。

スッキリした、とは言えないものの、秋穂の表情はその言葉だけで和らいでいく。

一礼した彼女は軽い足取りで千冬の横を通りすぎようとして――。

「ちょっと待て」

――一枚の紙を突きつけられた。

「……えっと？」

「消灯時間を過ぎての屋上外出。明日の放課後までに反省文を提出しろ」

「……」

「返事はどうした？　聞こえなかったのか？」

「いや、先生。今のいい空気は一体――」

「教師権限でもっと厳しい罰にしてもいいんだぞ？」

「ありがとうございます。反省文、書きたかったんですよねー」

「ならいい」

さらに懐から紙を数枚取りだし、秋穂に向けて放った。

口元を上げた含みのある笑顔で。

「喜べ、ちょうど持ち合わせの紙があった。合計五枚、明日の放課後までに提出だ。遅れたら、分かっているな？」

「ははっ……お休みなさーい」

ひくついた頬を固定したまま秋穂はその場を後にする。ドアを挟んだ向こう側から「うわぁーん！！」という泣き声が去っていった気もするが、千冬は動かなかった。

「……ふぅ」

滅多に見せない表情は、誰もいないからこそ出せるものだった。
他の教師や生徒にはもちろん、弟である一夏には決して見せることの出来ない弱さ。

座り込み、体を休めることはしない。が、その表情は暗いものだ。

「……あの馬鹿が」

呟いた言葉に込められた意味を誰も知らない。周りに見せない強さということが彼女の強さの一つでもあるのだ。

五分。表情が戻った千冬はいつもと変わらない歩調で屋上から姿を消す。
風は吹かれる者がいなくなったのを見計らったかのように、ピタリと止むのだった。

翌日。
『ごめんなさい。すみません。申し訳ありません。反省しています。もう二度としません』の五単語のみで構成された五枚の反省文、もといゴミを提出した秋穂はその数を倍に増やされた挙げ句、出席簿ではなく電話帳と見間違える辞書をその頭に降り下ろされたのだった。

第六話：一番怖いものは（後書き）

第六話です。
今回は比較的真面目な話でしたが……どうでしたでしょうか？
楽しんでいただければ嬉しいです。

さて、鈴ちゃん登場回も終わりました。ようやく原作1巻が終わったところですね。これが早いのか遅いのかはあえて言いません。
察していただければ幸いです。

世の中は何でしたっけ？　クリスマスですか？　よく分かりませんがそういうイベントで盛り上がってるみたいですね。

リア充は（ｒｙ

友人とこの小説について色々と話すのですが……。

友人「なぁ」
牡丹「何ー？」
友人「百合って好きなやつそんないないぜ？」
牡丹「そ、そんなことは……」
友人「現実見ろよ」
牡丹「うわぁぁぁ！！」

だそうです。
そうなんでしょうか？　私だけですか！？　そんなことないですよね！？

まぁいいんです。いいですよ。やってやれないことはない！！

と言うことで、次回はラブコメです。

ちゃんとした（定義は知りませんけど）ラブコメです。

暴挙としか思いませんけど……。頑張ります！！

第七話：スタートライン

「――そうそう、明日家に帰るからどこか遊びに行こうぜ」
『おう。そう言えば鈴がそっちにいるんだって？』
「ああ、中国の代表候補生でさ。でもあんまり変わってないぜ」
『変わってないって……お前も相変わらずだな……』
「相変わらずって何がだよ」
『……一夏、刺されれないように気をつけろよ？』
「刺されるって何だよ！？　何で俺が刺されなきゃいけないんだよ！！」
『……』
「おい、弾」

『ファースト幼馴染とやらとはどうなんだよ』
「逃げた！？　絶対に今逃げたよな！？」
『いいから答えろよ。毎日女の子に囲まれて楽しくやってんだろ？　一人ぐらい俺に紹介してくれよ』

「紹介って言っても……あっ、そういえば……」
『何だ！？　何かあるのか！？　誰か俺に紹介してくれるのか！？』
「いや、そういうわけじゃないんだけど。お前、秋穂――春日秋穂って子のこと覚えてるか？」
『春日？　ああ、俺達と同じ中学のやつだろ？　それがどうかしたか？』
「それが、秋穂もＩＳ学園に入学しててさー。そういう偶然もあるんだなーって思ってさ」
『……それで？』
「え？　いや、それだけだけど」
『誰がお前のハーレムについて教えろって言ったよ？　俺は！！

女の子を紹介してくれって言ってんだよ！！』

「ハーレムって……秋穂は友達だって。それに紹介って言ってもな、知り合いなんてそんなにいるわけないだろ？　こっちも色々大変なんだから……」

『はっ、羨ましい悩みだな。全国の男を敵にしてるぜ？』

「毎回同じこと言わせるなって。本当に大変なんだからな。トイレだって――」

『トイレ！？　お、お前まさか女子トイレに……』

「馬鹿！！　入るわけないだろ！！　……職員トイレを使ってるんだよ」

『へぇー。ん？　ＩＳ学園の教師って女性だけじゃ……』

「男もいるに決まってるだろ！！　とりあえず！！　時間決まったら連絡するから！！　じゃあな」

電話を終えた一夏はまとめられた荷物に目をやった後、ベッドに体を預ける。

「……まぁ、男性職員なんてほんと数人なんだけどな。疲れた。荷物は大丈夫だな。今日はもう寝よう」

◇　◇　◇　◇　◇

「えっと、地図は持ったし。コンパスもあるし。いざって時の電話もあるし……。うん、完璧！！」

久しぶりの休日。それに向けての秋穂の準備は――周りから見ればその評価は全く異なるだろうが――完璧だった。

持ち物を何度も確認し忘れ物のないようにする。

「あのカチューシャ、ずっと買いたかったんだよねー。ふふっ、楽しみだなー」

頭の中から嫌なことは消してしまう。必死に文章を考えた反省文は、昨日ようやく千冬に認めてもらえた。辞書が降り下ろされた時の痛みはいまだに覚えている。

たんこぶさえ出来なかったのは、千冬の経験によるものだろう。

口が裂けてもそんなことは言わないが、これからは考えて行動しようと思うのに十分すぎる罰だった。

「もう寝なくちゃ。明日も早いもんね」

◇　◇　◇　◇　◇

午前九時。朝日が既に上りきり、春の休日を明るく照らしていた。まだ夜は肌寒く感じる季節だ。しかし今日に限っては夜も暖かいのではないかと思ってしまうほどの暖かさで、少し走ればうっすらと汗ばんでしまう。

そんな絶好の外出日和に買い物に出掛けようとしていた秋穂は――。

「申し訳ありませんが、外出届がないと外出は許可できません」

――学園を出ることすら出来ずにいた。

「そ、そんなぁ……どうにかならないんですか？」

「当日の手続きとなりますと少しお時間がかかりますがよろしいですか？」

以前にも同じような生徒がいたのだろう。もしかしたら今でもいるのかもしれない。そう思わずにはいられない受付の女性の応対に、秋穂はただ言われるがままに記入していく。

「うわぁ……」

名前、クラスはもちろん、寮室番号など細かいところまで記入する欄があり用紙を見ただけで書く気が失せてしまう。

が、だからといってこのまま帰るというわけにもいかない。

目的があり、いつ外に出ようとこの手続きを済ませないといけないのであれば、『面倒臭い』という感情は今日行かない理由にはならない。

何より、平日は授業についていくのに精一杯だ。どこかに行こうという気にはならない。それに和服――そしてそれを着ている部員の姿――が可愛いという単純な理由で入部した茶道部の活動もある。

外に出る機会はあまり多くないのだ。

「えっと、これでいいですか？」

「はい。それでは確認をとりますので少々お待ちください」

書類に記入するだけでも五分程時間を使ってしまっていた。何度ついても状況は変わらないが、それでも溜め息が出てしまう。

（注意事項はちゃんと読んだと思ったんだけどな……ちょっとここの規則多いんだよねー）

薄いピンクのスカートに合わせたカチューシャ。いつもと同じ右側だけの三つ編みを弄りながら空を見上げる。

（そう言えば小学生の時、運動会で『雲一つない天気』って校長先生が言った途端に曇ってきたことがあったっけ……）

澄んだ青空。数えれば十年にも満たないまだ新しい記憶。だがとても遠い事のように思うのは自分の事に余裕が出来てきたからだろうか。

そんなことを考えながら、秋穂は目を閉じる。

「春日さん、お待たせしました。手続きが終わりましたよ」

「はい、ありがとうございます！！」

とにかく買い物だ。

元気よくＩＳ学園の門を出た秋穂はその背に「いってらっしゃい」という女性の言葉を受け走り出した。

「いってきまー……」

「門限は守ってくださいね！！　怒られますよ！！」

最後の一言でその足取りはさらに速くなるのだった。

聞いていませんでしたよ、と言わんばかりに。

◇　◇　◇　◇　◇

その日の朝は大変だった。
家に帰って掃除をした後に弾に会いに行こう、と思ってたのに準備をしていたら。

「一夏、どこに行くつもりだ？」
「どこって、別に家に一回帰るだけだよ。夕方には戻らないといけないしな。早めに行こうと思って」
「……家、家か……これはチャンスじゃないか？　そうだ、そうとしか思えない……」
「どうかしたのか？」

聞かれたから答えただけなのに、箒はというと途端にもじもじしている。
トイレに行きたいならすぐに行った方がいい。最近の子供は恥ずかしいなんて思ってるみたいだけど、生理現象じゃ仕方がない。それにトイレを我慢しすぎているといろいろな病気にかかってしまう。
たとえば膀胱――。

バシンッ！！

「痛っ！！　いきなり何するんだよ」
「お前、今変なこと考えていただろう」

変なこと？　病気のことか？　こいつは何を言っているんだ。せっかく俺が体調のことを考えてるってのに、それを『変なこと』だな

んて。
いくら幼馴染だからってその扱いはどうなんだろうか。そりゃ箒だって女子だ。こんなにむすっとしていて、すぐに木刀を振り回す歩く凶器みたいなやつだけど、女子だ。

バシンッ！！

「一夏、覚悟は出来ているな？」
「な、何だよ。せっかく人が心配してやってるのに。そんなんだから歩く凶器だって言われ……」

何でだろう。口に出すつもりなんてなかったのに。ああ、箒の表情が固まってる。しかも、笑顔でだ。
箒が笑顔を見せたことなんて最近はほとんどない、というか一回も見ていないんじゃないか？
勿体ない、顔は可愛いんだから笑えば絵になるだろうに。そんな仏頂面じゃいつまで経っても嫁の貰い手がつかないぞ。

そうやっていても今はいいんだ。まだ十代、花の女子高生だ。でも本当に怖いのはこれからなんだぞ。
千冬姉を例にあげると分かりやすい。現在二十四歳。このままだと三十歳になっても、四十歳になっても、彼氏なんて出来ないんじゃないか、と心配だ。

まぁそれも『今彼氏がいない』ってことを前提に話しているから、前提が崩れれば意味のないものになってしまうんだけど。

でもこの間『出来の悪い弟がいなければ見合いでもしてすぐにでも結婚できる』って言ってたからな。たぶん彼氏はいないと思う。

「どうかしたのか？」
「――っ！？」
いつまで経っても木刀が振り下ろされない。身構えているこっちとしては結構精神を消費してしまう。
それになんだか箒は下を向いてぶつぶつ言ってるし……。
もしかして我慢しすぎて本気で具合が悪くなってきたんじゃないのか？
そうだとしたら不味い。箒はこういう奴だから、自分の不調を他人に一切言わないはずだ。
たかがトイレ。でもされどトイレだ。行く行かないで病気になるかどうかの境目が決まってしまうのだから、絶対に行った方がいい。
そうか。俺がここにいるから行きにくいんだな？　いや、でもトイレは部屋の外にあるわけで、俺がここにいてもいなくても関係ないはずだ。そうじゃないと毎日どうしてるんだって話になる。そんなこと聞かないけど。
時間は……そろそろいい頃だな。
「じゃあそろそろ行ってくる。それとな、箒」
「な、なんだ？　私に何かあるのか？　い、いいぞ言ってみろ」
「ちゃんとトイレには行けよ？　俺に断わる必要なんて全くないんだからな」
その日三発目の打撃を受けることとなった。一発につき五千個の脳細胞が死ぬって言うけど、この威力じゃその倍死んでいてもおかしくない。というか死んでいるだろう。

さらば、三万個の俺。生まれ変わった時は長生きできるといいな。
自分のことだけに笑えなかった。

「ふぅ、こんなもんか」

家まで帰った俺は一通りの掃除を終わらせて一息つく。結構汚れてるかとも思ったけど、以外と手間はかからなかった。出て行く前に掃除はしてたし、千冬姉が定期的に帰ってきてるんだろう。

「はぁ……落ち着く」

座ってお茶を飲む。ただそれだけの行為だけど、やっぱり自分の家は落ち着く。向こうが嫌なわけじゃないけど、周りが全員女子っていうのはやっぱりきつい。
弾が言うようなパラダイスとは一番遠いような場所にも思える。

でも……。

「千冬姉がいたのは驚いたな……」

言葉にして、その事実を再確認する。ドイツに行ってたのは俺のせいだけど、その後どこに行ってたのか知らなかったからな。時々帰ってきては忙しそうにまた出て行ってたし。
千冬姉が言わないから俺も聞かなかったし。

分かったからいいけど。でも、俺がＩＳを動かせなくて入学してなかったらずっと言わないつもりだったか。そんな事を今では思うよ

うになってたりする。
聞かない自分を棚に上げてるようで嫌だけど。
まぁいいや。考えても仕方がない。千冬姉は無事で、元気にしてたんだからそれでいい。
たった二人の家族でも隠し事の一つや二つ持ってるものだ。何でも話せることと、話さなきゃいけないことは同じじゃない。
いつか必要だと思ったらその時は千冬姉の方から話してくれるだろうし、俺から聞いても答えてくれるだろう。

「昼飯は……弾のところの方がいいな。親父さんにも挨拶しとかないと」

電話を手に取り、慣れた番号を呼び出す。何度もかけている番号だ。
わざわざ画面を見なくても体が覚えている。
だから後は電話を耳に当てるだけ――。

『ちょっと！！　何でそういうことを先に言っておかないのよ！！　ほんと信じられない！！　一回殴られたいの！？　ちょ、そういうのは殴る――なんか文句あるの！？』

えっと……。
とりあえず画面を確認。発信先、五反田弾。うん、間違いない。
でも、今のはなんだ？　なんだか喧嘩してるようにも聞こえたっていうか、絶対に喧嘩してたよな。
とりあえず一度掛け直してみよう。もしかしたら取り込み中かもしれないし……ってあれ？

「弾からだ……」

今切ったばかりなのに。もう用事は終わったのか？　まぁこっちから掛け直そうとしてたんだから、ありがたい事に変わりはないんだけど……。

「もしもし」

『一夏か？　お前、今どこにいるんだよ』

「どこって、今からそっちに行こうとしてたところだよ。騒がしかったみたいだけどもういいのか？」

『あぁ、あれは……気にするな。お前には関係ないことだ』

「ふぅん。まっいいけど。で、昼飯もそっちで食おうと思うんだけど」

『了解。じゃあ待ってるからな』

電話を切ってズボンのポケットにしまう。俺の家から五反田の家まで約十五分。歩いてるうちにいい時間になるだろうし、この辺歩くのも久しぶりだから丁度いい。

「行ってきます」

誰もいない家に向かっての挨拶。また帰ってくることを約束する意味でも、俺は忘れない。今は半分無人みたいなものだけど、俺の家がここであることはずっと変わらない。

俺の帰ってくる場所はここなんだから。

◇　◇　◇　◇　◇

昼食を控えた時間帯、もうすぐ正午という時に秋穂は迷っていた。その手にはデパートで買い物を済ませたことを示すロゴの入った紙袋。地図とコンパスを使って、行きたい場所とは全く違う方向に足を進めていた。

「はぁ……なんで私って意味もなく彷徨っちゃうんだろう」

理由は単純。好奇心が旺盛すぎるのだ。デパートの入り口付近で『絶品デザート祭り、開催します！！』という宣伝を聞きすぐに飛びついた。

デザートの内容が『春をイメージしたケーキ』ということもあり良いお土産になると思ったのだ。だが、その考えは甘かった。

案の定迷ってしまった秋穂はもらった案内と持ってきていた地図、コンパスを重ねて道を進もうとするものの、着いたと思った所にはケーキ屋などなく今どこにいるかも分からない状態になってしまったのだ。

「前にもこんな事があった気がする……」

前にも、という彼女の表現は間違っていない。が、幾度となく迷っている彼女にとっての『前』がどの事例を指すのか、それは彼女にしか分からないものだ。

（あの時も、こうして迷ってたんだよね……）

どこか懐かしさを感じるのは、ＩＳ学園が他の学校と比べてもその機密の高さゆえに閉鎖されたところだからだろう。歩きながら、物思いにふけっていく。

思い出すのは二年前。想いの人に出会った時のことだ。

二年前、中学二年生だった秋穂の性格は今とほとんど変わっていない。否、過去があることで現在があることを考えれば今の秋穂の性格が当時と変わっていない、ということになるのだろう。

自分の好きなことを全力で楽しみ、後先考えずに突き進んでいく。この頃はコンパスを持っておらず、地図だけが秋穂の装備品だったため比較的その足取りは軽かった。

軽いと言っても迷っていることに変わりはない。ここだ、と信じた道を突き進んではいるものの、そんなことで目的地に着けるはずもなく結果敵に一本道で目の前が行き止まり、という最悪な場所に出てしまっていた。

「……一本道だし、戻るしかないよね」

戻っていくが、地図などすでにあてにならない。地図通りに進んでいると思っていて行き止まりに着いたのだ。
地図が間違っているという考えが頭を過ったが、そこで物にあたっても意味がない。迷ってしまったのは自分のせいであり、地図に罪はないのだ。

とはいえ、この場に留まっているわけにもいかない。もうすぐ夕方だ。春になったとはいえ夜は肌寒く、危険である。
しかし道の分からない者が適当に歩いて辿り着けるほど世界は狭くなかった。

「うぅ……。ここどこなの？　……真っ直ぐ帰ればよかった」

買い物の帰りに違う所に寄ろうとした事が間違いだった。真っ直ぐ帰っていれば、今頃家でゆっくりしている頃だ。

（見たことない風景ばっかり。はぁ……どうしよう）

今の彼女ならば近くの家のインターホンを鳴らして助けを求めるのだろうが、中学二年生の秋穂にはハードルの高い問題だった。

初めは軽かった足取りも時間が経つごとに重くなっていく。知らない土地、知らない人に囲まれた少女の精神は成熟していないこともあり、確実に削られていく。

交番さえ見つからず、道の真ん中で途方に暮れている時だ。

「あれ？　もしかして春日？」

「えっ！？」

自身の名を呼ぶ声に、思わず声が出てしまう。振り返って見るとそこには見たことのある赤髪の少年。

同じ中学、同じクラスの生徒だ。何と言っただろうか、個性的な苗字だった気がする。確か――。

「ご……ご……」

「そうそう。同じクラスの」

「郷田君」

「五反田だよ！！」

ほとんど男子とは関わってこなかった秋穂である。弾と話すのもこの時が初めてだった。
しばらく一緒に歩きながら自分の状況を話す。そんな秋穂を笑い飛ばすことなく、「大変だったな」と心配する言葉をかけてさえくれた。

「あっ、ここまでで大丈夫だよ。ここからなら帰り道も分かるし」
「もう暗いし送って――」
「だ、大丈夫だって！！　もう、心配性だなー。じゃあまた学校でね！！」

弾の前から走り去っていく秋穂。夕日に当てられたせいか、顔が火照っている。弾と一緒にいることが心地良い半面、恥ずかしくもあったのだ。

それから何度か言葉を交わした事は今でも覚えている。

（迷ってなかったら弾さんと出会わなかったんだよね……）

またもや溜め息をつき空を見上げたところで秋穂の動きが止まってしまう。思い出していた事も理由の一つだろう。その光景が、夜二人で歩いた道と重なって見える。

いつでも迷っている秋穂だが、基本的に覚えた道は忘れることはない。

「……嘘、じゃないよね」

『五反田食堂』
見間違えることのない看板が掲げられ、しかもその入り口には見覚えのある綺麗な赤髪。その人と目が合う。
しかしそれは今まで浸っていた思い出の中の人ではない。
「秋穂さん！？」
「蘭ちゃん！！」

◇　◇　◇　◇　◇

「お待たせしました！！」
お昼ご飯を私が持っていないこともあって、五反田食堂でお昼を食べることになった。
蘭ちゃんが店の前に立ってたのは一夏君を待ってたからだったみたいで、その一夏君も今では合流して同じ席についている。
みんなでご飯を食べるのは楽しいことなんだけど……。
「い、一夏さん。これ私が作ったんです！！」
「へぇ、旨そうだな。みんな料理も揃ったみたいだし食べるか」
みんなで手を合わせてのいただきます。これも別におかしいことじゃないんだけど……。
「秋穂さん、どうかしました？」

「えっ！？　な、何でもないよ！！　あははっ。美味しそうだねー」
全然大丈夫じゃなかった。
だって……と、隣に弾さんがいるんだもん！！
ど、どうしよう。私、とりあえず無難そうな日替わり定食を頼んだんだけど大丈夫かな？　大丈夫だよね？　がっついてるとか思われてない……よね？
あぁ、どうしよう。緊張して全然食べてる気がしないよ。
「で、向こうの学校はどうなんだよ？」
「どうもこうも、マジで忙しいんだからな。何回出席簿で叩かれたことか」
「……ＩＳ学園って出席簿で叩かれるんですか？」
チラッと弾さんの横顔を覗いてみる。私と同じ定食を話を聞きながら食べてる。うぅ……人の気も知らないで……。
「秋穂さん、聞こえてます？」
「えっ！？　えっと……なんだっけ？」
ヤバイよ。全然話聞いてなかった。一夏君もちょっと不思議な顔で見てくるし……弾さんもこっちを見てる！？
えっと、こういう時は……。
「だから、ＩＳ学園の先生って出席簿で叩いてくるんですか？　暴力ですよ暴力」
「あぁ、それは織斑先生だけだよ。他の先生は……ちょっと恐いか

な」

山田先生とか見てて危なっかしいもん。私もよく転ぶ方だけど、あの先生は絶対私より転んでるよ。

他の先生はそうでもない、っていうよりテキパキしてるよね。何であの先生ＩＳ学園の教師をしてるんだろう。

もしかして、ものすごくＩＳの操縦が上手かったりして。

うん。世界一の織斑先生がいるんだから別に不思議じゃないよね。専用機持ちのセシリアちゃんがいて、ＩＳを作った博士の妹の箒ちゃんがいて、一夏君までいるんだし。

そのメンバーに教えるんだから、むしろそれくらいの方がしっくりくる。

「こ、怖いんですか……」

「怖いって言っても暴力なんて振るわれないよ。ただ、そそっかしい先生がいて」

「つまり見てて怖い教師がいるってことか」

「そうそう。一夏君もそう思うよね？」

頷く一夏君を見ながらお味噌汁を口に含む。なんだろ、ただのお味噌汁じゃない感じがするよ。

味が深いって言うのかな。食堂のおばちゃんとはまた違う味。

「あの、一夏さん！！　この後用事とかあるんですか？」

「いや、夕方まではないけど」

「その付き合ってほしい所があるんですけど……」

「おい、一夏は俺に用があって――」

「お兄は秋穂さんについていってあげて。秋穂さん、まだ買い物途中なんですよね？」

……危なかった。

思わずお箸を落としそうになっちゃったよ。蘭ちゃん、積極的だよね。

って感心してる場合じゃないよ！！

「えっ！？　でも五反田君も予定があるんじゃ……」

「兄の予定はたった今無くなりました。そうだよね。お兄？」

蘭ちゃん……笑顔だけど顔が怖いよ。一夏君に見えない絶妙の角度といい、実は誰よりも強かだよね。

「じゃあ一夏さん、時間もないですし行きましょう！！」

「お、おう。じゃあな弾、また今度」

「行け行け。……いい加減猫被るの止めろよな」

「お兄？」

「何でもないです」

腕を組み、引っ張るような形で食堂を後にする一夏君と蘭ちゃん。凄くお洒落な格好してるなー。なんて思ってたら、これが狙いだったんだね。

「あの、用事があるんだったら別に……」

「俺は大丈夫。春日の方こそいいのか？」

えっと、何で弾さんが私に聞いてるんだろう。私何かおかしな事言ったかな？

どうしよう、本当に分からないよ。

「ほら、服とか買いに行くなら俺はついて行かない方がいいんじゃないのか？」

「服……」

そうだ。そう言えば新しい服も買いたかったんだ。うん、そうだよ。あんまりお金もないけど、今になって欲しくなってきた気がするよ。

「あの、服一緒に買いに行かない？」

「いや、だからそれはその……サイズとか知られるの嫌だろ？　別に無理しなくても――」

「無理なんかしてないよ！！」

あっ、ちょっと声が大きくなっちゃってる。こういうところが『無理してる』って思わせちゃってるんだよね。

しっかりしなくちゃ！！

せっかく蘭ちゃんが作ってくれた機会なんだもん。楽しまないと駄目だよね！！

「行こう、五反田君！！」

「お、おう」

これってデートだよね！？

頑張ろう！！　おー！！

「……まだ買うの？」

「もう一軒だけ！！　お願い！！」

お昼を食べた私が向かったのは、ついさっきまでいたデパートの近所にある別のデパート。

可愛いものがいっぱいあるのは知ってたんだけど、カップルのお客さんが多くて今までは行きづらかった店だ。

最初は私も持とうとしてたんだけど、弾さんが「男だから」って言って荷物を離さなかった。悪いとは思うんだけど、せっかく甘えられる時間だから目一杯甘えようと思ってお願いした。

そのせいで弾さんの両手は紙袋で塞がっちゃってるけど……。

「あっ、可愛い……」

最後、と言って入ったお店は私の好きなぬいぐるみや人形が沢山あるお店。

店内も明るくて、可愛く飾り付けられているせいもあってかその熊のぬいぐるみはものすごく可愛かった。

首に着けられたピンク色のリボン。可愛くデフォルメされたその姿は、他の商品を圧倒している。

って私が感じてるだけで、他にも可愛い物はいっぱいあるんだけどね。

「……」

うぅ……。高い。この熊さんがあるって知ってたらもうちょっと他の物を控えたのに。
どうしよう、って言ってもどうしようもないんだけど。
……しょうがないよね。お金がないんだし、買えないものは買えないよ。

「それ買わねぇの？」
「うん、今日はいいの。また来た時にとっておくの」

「ふぅん」

それから一通り店内を見て回った私たち、というか私は、小さなキーホルダーを買ってお店を出た。

もう日が傾きかけてる。門限までもう時間もあんまりない。

弾さんと一緒に買い物できて楽しかった。楽しかったけど……凄く疲れた。好きな人といるのに疲れちゃうって……。

「悪い春日。俺ちょっとトイレ行ってくる」
「う、うん。分かった。荷物見とくね」
「すぐ戻ってくるから！！」

私を引き留めるように言った弾さんは、そのまま走っていってしまう。
弾さんが私から遠ざかっていく中、ホッとしている私がいる。
結構歩いたのも理由の一つだけどドッと疲れがきちゃった。主に精神面で。

こんなんじゃ全然駄目だよ。弾さんも楽しくなかったよね。
元気にいこうとして空回りした感じがすごくある。
まだ帰ってもいないのに、反省会してるし……。

駄目駄目！！　まだデート中なんだからネガティブな考えは振り払わないと。

「よし！！」
「春日、大丈夫か？」
「えっ！？　えぇー！！　ご、五反田君、いつからいたの？」

「ついさっき帰ってきたとこ」なんて言ってるけど本当はどうなんだろう。
私、独り言とか言ってないよね？

「そろそろ門限ヤバイんじゃねぇの？」
「うん、そうなん……だけど……」

目を落とした私はそこで言葉を止めてしまった。
気まずかったからじゃない。

「どうかした？」
「あの……これ……」

今まではなかった紙袋。自分が買ったものだもん。内容ぐらいは覚えてる。
でも、目の前のものはそのどれにも当てはまらない。
だって、その紙袋は持ってないから。

そのロゴの入るお店で買ったのは、紙袋の必要のないキーホルダーだから。

だからその紙袋はここにはないはずなのに……。

「ああ、それは俺が欲しかったんだよね」

だから、と言葉を続けて袋を持った弾さんは、その袋を私の方に差し出して言った。

「これは俺からのプレゼント。まぁ記念みたいに思ってくれよ」

「……開けてもいい？」

私の問いかけに笑顔で応じてくれる。

心の中では急いで、でも包装紙を破かないように丁寧に。

そうして出てきたのはデフォルメされた熊さんのぬいぐるみ。首に着いているピンク色のリボンがその可愛さをさらに引き立たせている。

「……いいの？」

「もちろん。春日が気に入ったなら、だけどな」

「あ、ありがとう！！」

「……やっと笑った」

ぬいぐるみを抱える私に聞こえるかどうかの小さな声だったけど、その声は確かに私に届いた。

届いたけど……笑った？

私今日ずっと笑顔を心掛けてたと思うんだけど。

「春日、ずっと無理してただろ？　俺のせいでもあるんだけどさ。だから、そのお詫びもかねて」

「……その……」

気付いてたんだ。私、分かりやすいのかな？
ってそれどころじゃないよ。今日一日気を遣わせていたってことだよね。

せっかくのデートだったのに。

「あっ、勘違いすんなよ？　俺はすげぇ楽しかったぜ」

ちょっと重いけどな、と繋いだ弾さんの表情は本当に楽しそうで。
その笑顔で私も楽しくなっちゃって。

「そうそう、俺苗字で呼ばれるの好きじゃないんだ。呼び捨てでいいぜ」

そう言ってくれるのも、私の事を思ってくれているからかな？　なんて思うのは私の思い違いかな？

それでも今だけは。

今だけはいいよね？

「じゃあね、弾君！！」
「じゃあな、秋穂」

今日一日一緒にいてよく分かった。
弾さ……弾君がどういう人なのか。

そして強く思う。

やっぱり私は、この人が好きなんだ、と。

だから、頑張ろうと思う。
今よりもずっと。今よりももっと。

この人を好きになれるように。
この人に好きになってもらえるように。

第七話：スタートライン（後書き）

第七話です。
今回はラブコメ回ということで沢山の方にアドバイスをいただきました。
ここで活躍されている先生から、小説を書いている後輩まで幅広い意見を求めました。

すみません。
全然ラブコメじゃないです。

アドバイスをくれた全ての方に謝らなければいけません。
私の限界、というものを目の当たりにしました。

日々勉強とはよく言いますが、もっと勉強しないといけないと、そう強く感じました。

さて、次回ですが少し迷っています。
番外編を書きたい気持ちはありますし、やっぱりヒロイン揃ってからかなとも思います。

自由気ままな作者による自由な小説ですが、これからもよろしくお願いします。

番外編一話：姉と弟（前書き）

えっとですね。
本編とは全く関係ありません。ただ書きたかっただけです。本編のこの人は内心ではこんなこと思っていないと信じたいです。

まぁ思いっきりネタ回です。

拙いながら一生懸命頑張りました。些細なクリスマスプレゼントだと思ってください。

番外編一話：姉と弟

十二月二十四日。クリスマスイヴ。
十二月二十五日。クリスマス。
とても凄い救世主の誕生日、そしてその前夜とされているこの日だが、それを意識して過ごしている人は少ない。

世間は恋人達の愛の巣窟となってしまう。

この日に限っては、町に出てカップルを見付けるなという方が難しい。
まるで見せつけているかのようなその振る舞いに、少数かもしれないが『爆発しろ』というなんとも危険な思考を抱いている者がいるほどだ。

それほどまでにクリスマスは人の気分を良くも悪くも高揚させる。

それは例えば実の弟に対して『教師だから』という理由で名前を呼ばせることさえしない姉であっても同じである。

◇　◇　◇　◇　◇

「山田先生、あくまでも仮定の話だがクリスマスで異性と一緒に過ごす場合、どんな服装がいいと思う？」
「異性……ですか」

「あくまでも仮定の話だ。周りが騒がしいからな、私も少し便乗しようというわけだ」

世間はクリスマス。学校全体がざわついているのがよく分かる。だから私がこうして聞いているのも不自然ではないはず。

去年は一緒に過ごせなかったからな……。

今年こそは……ふ、二人で楽しいクリスマスにしなければならない！！

い、一夏も同じ気持ちであるはずだ。なにせ学校でも『千冬姉』と呼んでくるぐらいだからな。

その……私としても殴るのは心苦しかったが、仕方がない。心を鬼にしなければならないのだ。

決して一夏に触れたかったわけではないぞ！！

いや、触れたくないというわけではなくてだな。むしろ触れたいんだが――。

「織斑先生大丈夫ですか？」

「すまない。少し考え事をしていてな」

「そうですか。ぶつぶつ言っていたので何事かと思いました。それで、服装ですよね？」

「ああ、出来れば具体的に頼む」

私は流行りのファッションをあまり知らない。くそっ、こんなに悩むならしっかりと学んでおくべきだった。

明日からファッション雑誌を定期講読するか。
とにかく、今はこちらに集中するべきだ。

山田真耶。男性経験は少なそうだが、今は贅沢を言っている場合ではない。
少しでも生の声を聞けるのであれば聞くべきだ。ネットは当てにならん。まったく、あいつらせいで何万無駄にしたと思ってるんだ。

今になっても腹が立つ。

「そうですね。着飾らない、というのはどうでしょうか？」
「着飾らない？　その意見は新しいな」

そうですか？　と言わんばかりの表情で首を傾げる山田先生。やはり私の人選ミスか。着飾らないなど出来ないに決まっているだろう！！

なにせ一夏と一緒に過ごすのだぞ？
少しでも綺麗に見られたいじゃないか！！

とは言えない。
そうか、と一言返して職員室を出ていこうとする。しかし、どうしたものか……。

「織斑くん競争率高そうですし頑張ってくださいね？」
「――っ！？」

な、何故だ！？　何故私が一夏と一緒に過ごそうとしていることを知っている？
山田先……いや、先生などという敬称をつける必要などない。

たった今なくなった。

つまりこの女。

『一夏は私と一緒に過ごします。まぁ誘うだけなら許してあげますよ？　一夏は優しいですからねー。私にはちょっと冷たくしたりするんですよ。酷いと思いませんか？』

とでも言いたいのだろう。

たかだか副担任だというだけで私を差し置いて……。

「あの……織斑先生？　顔が怖いんですがか…」

「山田先生」

「何でしょうか？」

「覚えておくといい。眼鏡で巨乳が勝てると思ったら大間違いだ。私を見くびらないでもらいたい。本気を出せばイチコロだ！！」

言ってやった。これでこの女はひとまず大人しくなるだろう。一時的なものかもしれんがな。

まぁいい。クリスマスで過ごす時間を確保しなければいけないのは確かだ。

情報提供に免じて束特製の盗撮機を仕掛けるのは許してやろう。

だが、問題があるのはここからだ。

「一夏さん！？　今日はわたくしと一緒に出掛ける約束ではないの

ですか！？」
「いや、今聞いたんだけど……」

「一夏、今日も放課後に稽古をつけるぞ。一日怠ると三日以上の差が開いてしまうからな」
「確かにそうだけど、昨日は『今日は休みだ』って言ってなかったか？」

「一夏、今日の夜アンタん所に行ってもいい？」
「いいねぇ！！　この際だからみんなでクリスマスパーティーしようよ！！　プレゼント交換がないのは悔しいけど、みんなで作る料理は絶対美味しいよ」

春日の意見でまとまりかけているな……。
あいつ、見かけによらず積極的だな。ああいうのに限って『あわよくば』と考えていることを実行してしまうものだ。

だが……不味いな。
このままでは決まってしまう。

くっ……今私が割って入るのは明らかにおかしい。まるで邪魔をしているみたいじゃないか。

邪魔しているんだがな。

あの小娘ども、一夏と年が近いと言うだけでそのポジションにいるとは……。とりあえず束特製の盗撮機は設置せざるを得ないな。

いい空気になりそうになった瞬間乱入してやろう。

「悪いみんな、今日は用事があるんだ」

いきなり頭を下げる一夏。

潔いのはいいところだ。だが、男が簡単に頭を下げるべきじゃない。

頭を下げるのは彼女の父親に結婚の挨拶に行った時だけで十分だ。

ふっ。彼女など認めはしないからな。お前が頭を下げるべき時はない。

あぁ！！　また頭を下げた！！

おそらく春日を抜いた三人に対してだろう。

小娘がっ！！　ボコボコにして国に送り返してやろうか？

『年が近い』という武器しか持っていないくせに、平然と私の一夏に罵声を浴びせるとは……いい度胸だな。

「あっ、織斑先生おはようございー……」

何だ？若干生徒たちが私から遠ざかった気がするが……どうでもいいな。今は一夏の用事を聞き出す方が優先だ。

キーンコーンカーンコーン。

チッ。
まあチャイムに救われたか。運のいい小娘め。
だが次同じことをすれば……やるしかないな。

ど、どうすればいいんだ？
私が一夏と話をしようとすると決まって校内放送が流れて邪魔をしてくる。もう放課後になってしまったぞ。
誰かが私に喧嘩を売ろうとしているのか？　というかこれはもう売っているだろう。
いい度胸だな。誰かは知らんが私の恐ろしさを体に教えてやろう。

「千冬姉、ちょっと話が――」

バシンッ！！

「何度言えば分かる。織斑先生だ」

あぁ！！　一夏、すまない。私もこんなことはしたくないんだ。
だが……。私は教師なんだ。ここでそれを曲げるわけには……。

「痛……。今日だけど時間空いてるかな？」

い、一夏！？
それはまさか私とクリスマスを過ごしたいという意思表示か！？
いや、疑問の余地などない！！

これは……一夏からのメッセージ！！

まさか一夏の方から私を誘ってくれるとは。
少し緊張してきたな……。手にも汗をかいてきたぞ。
顔は大丈夫か？　変な表情とかしていないか？
くそっ、鏡を見たい。一夏に見せるべき表情かどうかを確認したい。

しかしそれをして不審に思われてしまっては本末転倒。
ここは乗りきるしかない！！

私には出来る。出来るはずだ！！

「ああ、時間なら空いている。どうかしたか？」

分かっている。分かっているぞ。
分かっているが……あえて相手から誘ってくれるのを待つこの優しさ！！

一夏、感じているか？　そんなに言いづらそうにしなくてもいいんだ。
さぁ！！　舞台は整ったはずだ。言ってくれ、その言葉を先を。

今日のこの後の時間を何に使うのかを！！

「今日の授業で分からないところがあって。織斑先生に教えてもらえないかと……」

◇　◇　◇　◇　◇

「お前は馬鹿か？　同じところで何度も間違えるな」
「わ、分かってるよ」
「はぁ……分かっていないから間違えるんだ。ほら、次はこの問題だ」

聖夜の勉強会はその後も就寝時間ギリギリまで続いた。
何度も同じミスをしてしまう一夏だったが、千冬から指導が入ることはなかった。

長く続いた勉強会の中、いつもと違ってその表情が和らいでいることに一夏は気付かない。

一生懸命問題に取り組む弟の姿に微笑みながら、姉は今日も言う。

おそらく明日も。明後日も。一週間後も。一年後も。卒業後も。死ぬ間際にも。

言っているはずだ。

「この馬鹿者が」

番外編一話：姉と弟（後書き）

はい、番外編一話でした。

いや、短編だと筆が進む進む。なんだかんだ二時間かかってますけど……。

私にしたら短い方なんです。圧倒的に。

さて、クリスマス回。他のキャラはどうしようか悩み中です。

前にも言ったかもしれませんが正直ヒロインも揃っていませんし、

と言うのが本音です。

まぁぶっちゃけその時のテンションですよね。

次回は年内に更新できるか微妙です。

な〇はのゲームをしないと……。

感想やアドバイス、よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7237y/

ＩＳ―インフィニット・ストラトス― 季節の廻る場所

2011年12月25日02時46分発行